第３章　伊賀市の歴史文化の特徴

１．伊賀の歴史文化

文化財と自然に恵まれた本市は、紀伊半島のほぼ中央に位置し、水系としては大阪湾に注ぐ淀川水系の上流、木津川の最上流部にあたる。行政区分としては三重県に含まれるが、伊賀地域（本市・名張市）は伊勢地域とは異なり、歴史的に近畿圏との結びつきが強く、現在も生活・文化において近畿地方との関係性が濃く現れている。なお、旧伊賀国の範囲は､現在の県境を越えて旧大和国や旧近江国に及んでいた時期もあり、近代以前の「伊賀」をイメージする範囲は今よりも広がりをもっていた。

「伊賀」のイメージの一つに盆地地形であることが挙げられる。その由来である約400 万年前にできた「古琵琶湖」は、高温に耐えることができる粘土と良質な米を生み出す土壌をもたらした。また、小さな盆地が連なる地形は、底冷えと蒸し暑さとともに、それぞれの地域のつながりを強める風土を生み出した。

市の中心である上野城下町区域は、近世以降は伊賀地域の政治・行政の中心地としてだけでなく、商工業や手工業生産も展開した。一方、農村部は沖積地の水田や中山間地の棚田に象徴されるように、米作りを基本としながらも近代以降は蚕業や林業など、地域の地形的特性にあわせた産業が盛んとなった。都市上野を中心とし、周辺の村落との間でヒトやモノが循環するありようが、現在に続く伊賀の地域社会と、それに根差した重層性と多様性のある歴史文化の基本となった。

ここでは、第１章、第２章をふまえ本市の歴史文化の特徴について、全国的にも有名な忍者や松尾芭蕉、伊賀焼といった**１.「伊賀」をイメージさせるもの**、現在の人びとの暮らしの基層となっている歴史文化について**２．城下町と村々**、伊賀盆地に展開した重層性のある歴史文化と交流の広がりを**３．時間と空間が交差するところ、「伊賀」**、とした３つの観点にまとめ、本市の歴史文化の特徴を説明する。

表 18　伊賀の歴史文化の特徴の概要

観　点		歴史文化の特徴	概　要
1	「伊賀」を イメージさせるもの	**忍びの国　伊賀**	伊賀流忍者を生み出した戦国時代の伊賀国の面影は、今も集落に中世城館のある風景や講や座といった人びとの繋がりを通じて今も暮らしのなかに残されている。
		芭蕉翁と俳諧文化	俳聖松尾芭蕉を生んだ伊賀では、芭蕉翁にちなむ文物が今も数多く伝えられている。芭蕉翁以後、俳句は町や村に住む人びとの間でも詠まれ、俳諧文化として伊賀に定着し、その伝統は今も受け継がれている。
		伊賀焼今昔	古琵琶湖層群に堆積した粘土を材料とする伊賀焼は、独特の風合いをもち、茶人たちに愛され続けてきた。伊賀焼をめぐる文化財からは、連綿と受け継がれてきた技術と伝統を知ることができる。

2	城下町と村々	藤堂高虎と 上野城下町	1608 年（慶長 13）に領主となった築城の名手、藤堂高虎により開かれた上野城下町の区域には、藩校や武家屋敷、町家などが残り、城下町の景観を今に伝えている。市内最大の祭礼、上野天神祭は、華麗なダンジリや鬼行列とともに、祭の文化が現在も受け継がれている。
		「仏神崇重ノ国」伊賀	戦国時代の興福寺多聞院の僧英俊により「仏神崇重ノ国」と評された伊賀の村々には、人々が篤く信仰してきた歴史を示す、寺社の建造物や彫刻、神事などさまざまな文化財が市内の各所に残されており、現在も引き継がれている。
3	時間と空間が交差するところ、「伊賀」	古琵琶湖層群と伊賀の自然	伊賀盆地の基層となった古琵琶湖層群には、ミエゾウなど古生物の痕跡を見ることができるほか、盆地の里山とそこを流れる清流には、四季折々の彩りと希少な動植物を見ることができる。
		遺跡の宝庫、伊賀	ヤマト政権誕生から豊臣秀吉の時代まで政権のあった近畿地方に隣接する伊賀には、古墳や寺院跡、官衙など各時代を象徴する遺跡が数多く残されている。
		東西を結ぶ道と 伊賀八宿	東西交通の要衝であった伊賀には、古代から近代に至るまでヒトとモノの往来で賑わい、近世には藤堂藩により伊賀国内の街道と 8 カ所の宿場が整備された。東西文化の結節点であったことを示す、さまざまな文化財や、交通路にまつわる文化財が残されている。
		上野城下町から 近代都市上野へ	上野城下町をベースに近代都市として発展した上野には、明治以降も行政や教育、商業の拠点となる施設が設けられるとともに、伊賀組紐や伊賀傘、伊賀米・伊賀酒など産業が発展し、現代伊賀の基盤となっている。

２．「伊賀」をイメージさせるもの

2-1　忍びの国　伊賀

「伊賀」について問われた時、真っ先に思い浮かべるのが「忍者の里」である。

四周を山々で囲まれ、小さな盆地や谷あいの地形からなる伊賀盆地では、早くから東大寺や摂関家など権門寺社の荘園が入り組み、大名権力の浸透を阻んできた。小さな権力がせめぎあい、伊賀地域内の各地域の抗争が激化するなかで、小規模な中世城館が乱立し、同時に少人数による戦いの手法が発達した。こうした地域社会

福地城跡（柘植町）

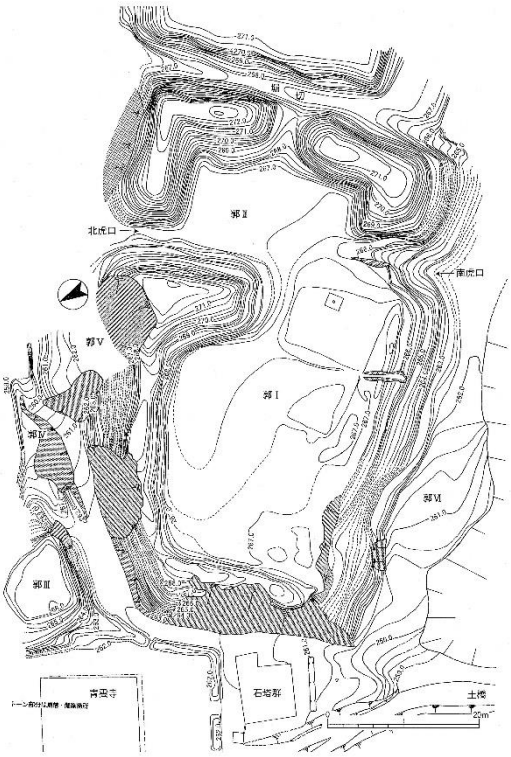


図 18　百地砦跡（喰代）

春日神社拝殿（川東・県指定）

伊賀流忍者博物館（忍者屋敷）

日本遺産構成文化財案内サイン

が忍者を生み出した背景と考えられる。「忍者」の呼称は後世になってからのもので、戦国時代は土豪や地侍で構成される「伊賀衆」と呼ばれ、隣接する大和国や畿内近国の戦場で傭兵として活躍した。

伊賀地域（本市・名張市）の中世城館は 650 カ所以上あるとされ、その密度は日本一である。近世には郷士（無足人）の屋敷地となり、現在でも住む人びとがいる。農村景観のなかに佇む中世城館の姿は、伊賀地域独特の風景である。

同時に地域の中心となったのは、惣荘や惣郷の神社であり、寺院であった。鎮守や寺院は、1581 年（天正 9）の織田信長による伊賀攻め、いわゆる天正伊賀の乱で数多くが失われたが、春日神社拝殿（川東・県有文）や観菩提寺本堂・楼門（島ヶ原・国重文）、高倉神社本殿（西高倉・国重文）のように焼失を免れたものもあり、今でも地域の信仰の中心となっている。

近世に入り、伊賀衆であった土豪・地侍の多くは、藤堂藩政下で藩禄を与えられない郷士「無足人」として位置づけられたが、彼らのうち一部の者が「伊賀者」として位置づけられ、城内や江戸屋敷の警護、有事には藩の命令を受けて探索活動を行った。上野城下町で伊賀者が居住した一角は「忍町」と呼ばれ、今も「忍町」の町名にその面影を留めている。

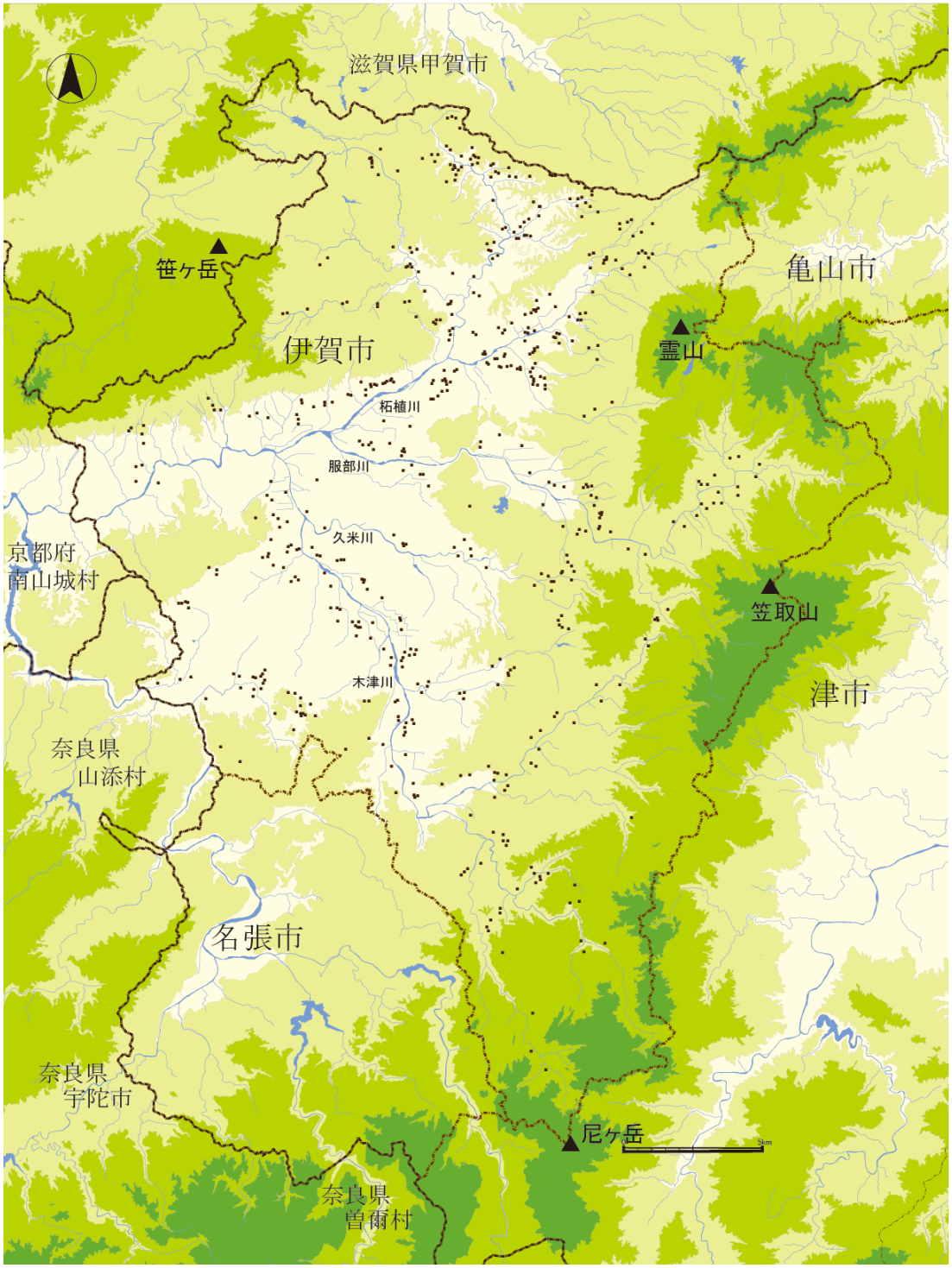


図 19　伊賀市内における中世城館の分布

2-2　芭蕉翁と俳諧文化

俳句、「ＨＡＩＫＵ」は世界でいちばん短い詩とされ、世界中の人びとに親しまれている。中世に流行した連歌は近世以降に庶民の間にも広がり、それを俳諧として芸術性を高めたのが俳聖松尾芭蕉であった。芭蕉翁は、1644 年（寛永 21）に伊賀国で生まれ、幼名を金作、通称甚七郎、後に宗房と称した。1662 年（寛文２）頃に藤堂藩伊賀付の侍大将藤堂新七郎良精の嗣子、主計良忠（蝉吟）に仕え、良忠と交流のあった京の俳人北村季吟の影響を強く受けた。良忠の没後、1672 年（寛文 12）正月、29 歳になった芭蕉翁は、菅原神社（上野東町・市史跡）に『貝おほひ』を奉納し、江戸へ出立した。1675 年（延宝３）頃から門人も現れ、精力的に俳諧活動を行い、新たな作風「蕉風」を確立した。1694 年（元禄７）に 51 歳でその生涯を終えたが、そ

蓑虫庵（上野西日南町・県史跡及び名勝）

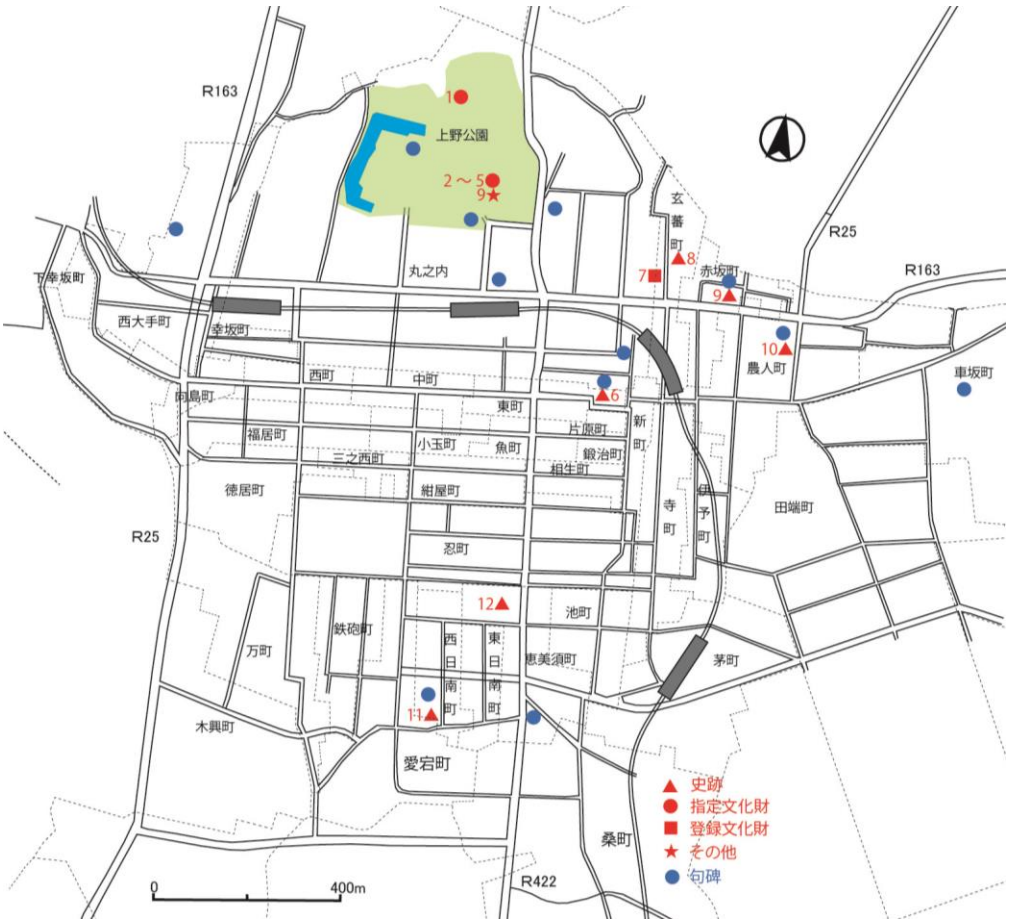


図 20　伊賀市中心市街地における松尾芭蕉関係文化財・句碑

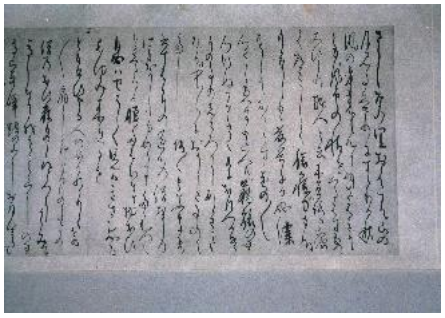
表 19　松尾芭蕉関係文化財等一覧

No	指定種別		名　　称	所在地
1	国	重要文化財（建造物）	俳聖殿	上野丸之内
2	国	重要文化財（書跡）	更科紀行　芭蕉自筆稿本	上野丸之内
3	県	有形文化財（書跡・典籍・古文書）	松尾芭蕉関係資料	上野丸之内
4	市	有形文化財（書跡・典籍・古文書）	庵日記、　横日記･蓑虫庵句会句牒	上野丸之内
5	市	有形文化財（書跡・典籍・古文書）	紙本墨書芭蕉自筆月見の献立	上野丸之内
6	市	史跡	貝おほひ奉納の社	上野東町
7	国	登録有形文化財（建造物）	中森家住宅主屋･離れ･前蔵ほか	上野玄蕃町
8	市	史跡	さまざま園	上野玄蕃町
9	市	史跡	芭蕉翁生家	上野赤坂町
10	市	史跡	愛染院故郷塚	上野農人町
11	県	史跡及び名勝	蓑虫庵	上野西日南町
12	市	史跡	藤堂新七郎家墓所	上野恵美須町
13	県	史跡	福地城跡（芭蕉公園）	柘植町
14	未	有形文化財（建造物）	芭蕉翁記念館	上野丸之内
15	未	有形文化財（彫刻）	木造芭蕉像	柘植町
16	未	史跡	万寿寺（芭蕉の墓）	柘植町

の間、伊賀国と江戸を行き来し、伊賀の俳諧文化にも大きな影響を与えた。伊賀国では、服部半左衛門（土芳）や山岸重左衛門（半残）、高畑治左衛門（市隠）、浜市右衛門（式之）ら武家俳人と比較的早い時期から親交があり、のちに窪田惣七郎（猿雖）、貝増市兵衛（卓袋）ら商家の俳人とも交流し、彼らは「伊賀蕉門」と呼ばれた。

芭蕉翁が仕えた新七郎家の下屋敷は現在の上野玄蕃町にあり、ここには、1688 年（貞享５）に芭蕉翁が招かれ、その庭で詠んだ「さまざまの事おもひ出す桜かな」にちなみ名づけられた「さまざま園」（上野玄蕃町・市史跡）や、新七郎家陪臣の武家屋敷、中森家住宅（上野玄蕃町・国登録）が残る。そしてその翌年、芭蕉翁は、紀行文の名作『奥の細道』を著した。

故郷塚（上野農人町・市史跡）



更科紀行（上野丸之内・国重文）

芭蕉翁の伊賀国における活動を通じて、芭蕉翁ゆかりの五つの庵が「芭蕉五庵」と呼ばれるようになった。1758 年（宝暦８）成立の白井鳥酔『伊賀実録』では、「翁旧遊五庵」として、無名庵・蓑虫庵・瓢竹庵・東麓庵・西麓庵が挙げられている。このなかで往時から場所を保ち続けているのが蓑虫庵（上野西日南町・県史跡）で、1955 年（昭和 30）に上野市が購入し、現在に至っている。

芭蕉翁没後、その遺髪が納められ故郷塚（上野農人町・市史跡）が愛染院に設けられた。なお、大正期には、かつては蓑虫庵の一筋東にあったとされる

瓢竹庵が愛染院境内に復興された。

芭蕉翁の遺墨は江戸時代から門人らにより収集する取り組みが行われてきた。焼失や散逸を繰り返してきたが、1959 年（昭和 34）には、菊本直次郎や川崎克ら地元の有志が収集した資料を所蔵品とし、間組による寄付により建設された芭蕉翁記念館が上野公園内に完成した。ここには、1688 年（貞享５）に、岐阜を出発して仲秋の名月を更科（長野県千曲市）で賞した折の紀行文、『更科紀行　芭蕉自筆稿本』（上野丸之内・国重文）や、芭蕉翁が門人を招いて月見の宴を催した際の献立書「月見の献立」（上野東町・市有文）、服部土芳自筆本『庵日記』『横日記』（上野丸之内・市有文）などが所蔵されている。

俳聖殿（上野丸之内・国重文）

「しぐれ忌」が行われる万寿寺（柘植町）

９代藩主藤堂高嶷の還暦を祝って藩士・領民が句を贈った 1805 年（文化２）の「祐信院様耳順殿様御賀発句写」には、藩士や町方の商職人のほか、郷方の庄屋や郷士など、幅広い人びとの名前が記載されている。また、神戸神社や花垣神社では、扁額を神社に奉納しており、芭蕉翁没後も伊賀国では町や村の間で俳句が親しまれていた。

明治以降も芭蕉翁の周年忌が行われ、その都度、記念行事や遺蹟の整備が行われてきた。二百年忌では、愛染院故郷塚での法要や俳句興行などが行われ、柘植町では芭蕉公園が整備されて命日に「しぐれ忌」が開催された。また、1942 年（昭和 17）には、生誕三百年に合せて上野公園内に俳聖殿（上野丸之内・国重文）が建設され、全国俳句大会が開催された。その後も、10 年ごとに周年行事が行われ、現在も毎年 10 月 12 日に芭蕉祭、11 月 12 日に柘植町の万寿寺において「しぐれ忌」が開催されている。

戦後間もない 1947 年（昭和 22）から始まった芭蕉祭は、毎年上野公園俳聖殿前で式典が開催されるほか、全国俳句大会、遺蹟見学などが開催され、秋の一大催事となっている。そのほか、学校教育のなかに俳句が取り入れられるなど、芭蕉翁生誕地である本市には、その遺蹟とともに、俳諧文化が受け継がれている。

表 20　松尾芭蕉句碑一覧

句	所在地	建立年
きてもみよ甚べが羽織花ごろも	上野丸之内 だんじり会館前庭	1995
まゆはきを俤にして紅粉の花	上野丸之内 だんじり会館前庭	—
升かふて分別かわる月見かな	上野丸之内 旧市役所前前庭	1994
やまさとはまんざいおそし梅の花	上野丸之内 上野公園東入口	1967
さまざまの事をおもひ出す桜かな	上野丸之内 上野公園	1918
草いろいろおのおの花の手柄かな	上野丸之内 上野図書館入口	1984
みのむしのねを聞きにこよくさの庵	上野恵美須町銀座通り脇小公園	1989
新藁の出初て早き時雨哉	上野車坂町西麗庵跡	1968
草臥（くたびれ）て宿かる比や藤の花	上野西大手町旅館「ふじ」庭内	1981
よくみればなずな花さく垣ねかな	上野西日南町蓑虫庵	1939
古池や蛙飛びこむ水の音	上野西日南町蓑虫庵	—
古里や臍の緒に泣くとしのくれ	上野赤坂町生家前	1963
冬籠りまたよりそはん此はしら	上野赤坂町生家内無名庵跡	1984
初さくら折志もけふはよき日なり	上野東町天満宮（菅原神社）	1968
家はみな杖に白髪の墓参り	上野農人町愛染院	1954
数ならぬ身となおもひそ玉祭り	上野農人町愛染院	1971
花を宿にはじめおわりやはつかほど	平野中川原フレックスホテル	1996
志ぐるるや田のあらかぶの黒む程	西高倉高倉神社入口	1968
蛇食ふと聞けば恐し雉の声	西山西山公民館前	1967
高水に星も旅寝や岩の上	岩倉岩倉峡	1988
五月雨も瀬ふみ尋ねん見馴川	岩倉岩倉峡	1994
春なれや名もなき山の薄霜	長田旧奈良街道脇	1983
うぐひすの笠おとしたる椿哉	長田金比羅神社	1994
やがて死ぬけしきは見えず蝉の声　（芭蕉）	長田西蓮寺	1976
月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿	三田 JR 伊賀上野駅前	1981
手ばなかむおとさへ梅のにほひかな	一之宮敢国神社入口	1962
畠うつ音やあらしのさく良麻	荒木白髭神社	1957
月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿	西明寺サンピア伊賀	1999
香に匂へうに掘る岡の梅の花	菖蒲池市場寺	1954
城跡や何やらゆかし菫（すみれ）草	下神戸丸山集落東部	1869
一里は皆花守の子孫かや	予野花垣神社	1835
蕎麦はまだ花でもてなす山路かな	柘植町芭蕉公園	1885
古郷や臍の緒になくとしの暮	柘植町芭蕉公園入口	1893
草いろいろおのおの花の手柄かな	下柘植伊賀支所前	1990
枯芝やややか希ろふの十二寸	平田植木神社	1968
からかさにおし分見たる柳哉	下阿波須原大橋畔	—
初しぐれ猿も小みのをほしげ也	上阿波山中長野峠小公園	1786
初しぐれ猿も小みのをほしげ也	上阿波山中長野峠小公園	1991
丈六に陽炎高し石の上	富永新大仏寺	1810
行秋や手をひろげたる栗のいが　ほか 10 句	長田芭蕉の森（観察の園）	1990
川上とこの川しもや月の友　　ほか３句	下友生下友生橋欄干	1991
春なれや名もなき山の朝がすみ　ほか 20 句	服部町くれは水辺公園	1995

三重県環境生活部文化振興課ＨＰ「俳句のくに　みえ」三重県内の句碑一覧　より

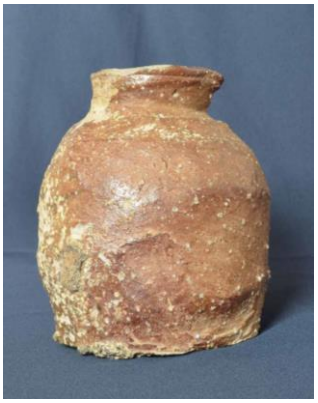
2-3　伊賀焼今昔

1581 年（天正 9）10 月、堺の商人で茶人であった津田宗及は、豪商たちによる茶席でのしつらえ物の一つに「伊賀壺」を飾ったという。中世六古窯（越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前）に含まれない伊賀壺が、豪商たちの間で愛でられたのは、他の焼き物にはない、伊賀焼独特の風合いが茶人たちに好まれたからに他ならない。また、川端康成がノーベル文学賞を授賞した記念講演録『美しい日本の私』には、川端が伊賀焼の素晴らしさを語ったことが記されている。

古琵琶湖層に堆積した耐火性の高い粘土を原料に、高温で焼き締めてできる伊賀焼は､燃料のアカマツの灰が被りビードロ釉と呼ばれる独特の風合いを引き出している。

市域における窯業生産の歴史は古墳時代後期にさかのぼる。陶器の源流となる須恵器生産の技術は 6 世紀に伝わり、飛鳥・奈良時代になると、本格的に生産されるようになった。 4 基の須恵器窯が調査された御墓山窯跡（佐那具町）では、食器類だけでなく宮殿形陶製品（緑ケ丘本町、県有文）など、仏教信仰にかかる製品も出土している。

桃山時代の伊賀焼の窯跡として確認されているのが、16 世紀末から 17 世紀初頭の水指や花入などが出土している西光寺窯跡（槙山）、採集された遺物から 17 世紀初頭の窯跡と想定される堂谷窯跡（丸柱）で、これらが「古伊賀」「藤堂伊賀」と呼ばれる時期のもので、織豊期の豪商や大名に愛された当時の伊賀焼生産の断片を知ることができる。ただし、隣接する信楽焼の 13 世紀代の窯跡の一つ「五位ノ木窯」（甲賀市）は、近世前期までは伊賀国領であったことをふまえると、伊賀焼の起源は 13 世紀代にまでさかのぼるといえる。

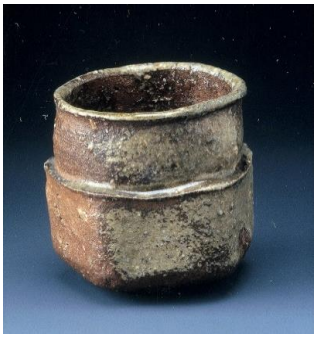


仏土寺出土品　陶製壺
（県有文）

「古伊賀」「藤堂伊賀」は、骨董品として珍重されて各地に広まった。できるだけまとまったものとして後世へ伝えるため､本市に居住した医師奥知勇により収集された 34 件の伊賀焼・信楽焼のコレクション（丸柱・県有文）が 1976 年（昭和 51）11 月に上野市へ寄贈された。

「藤堂伊賀」と呼ばれる伊賀焼の生産は、1669 年（寛文 9）の伊賀・近江国境の三郷山が藩の管理下となり陶土の採取が制限されると､その生産は停滞することになった。

伊賀焼が再興するのは、宝暦年間（1751～64）以降で、弥助・久兵衛・定八・十助・林蔵らが「瀬戸屋」を営んでいたとされている。彼らによる伊賀焼は日常雑器を中心に生産するもので「復興伊賀」と呼ばれた。

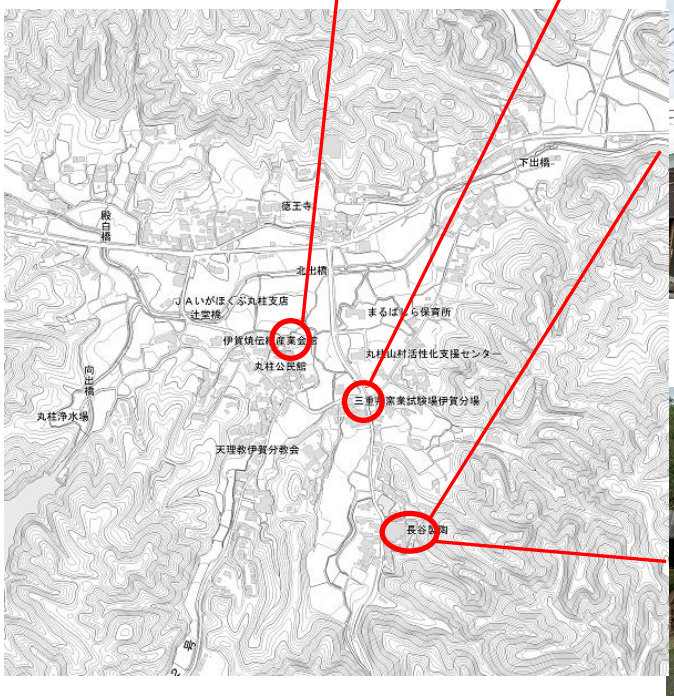


奥知コレクション（県有文）

「復興伊賀」の中心となったのは、丸柱村の弥助・定八とされ､藩主から陶器に刻印するための御印を拝領した。丸柱にあった弥助窯は、その一部が発掘調査され、椀や土瓶、行平などが出土した。また、これらの製品は

伊賀焼伝統産業会館

伊賀焼陶磁器工業協同組合



長谷園大正館（丸柱・国登録）

近世の連房式登り窯（丸柱・国登録）

図 21　丸柱地区の伊賀焼関連遺構

上野城下町遺跡でも出土し、江戸時代後期の伊賀の人びとの生活の器となっていた。なお、江戸時代には、伊賀焼が木津川を使って大坂まで移出されていたことも知られている。

近代以降も地域の主要工業品として生産が続けられ、1904 年（明治 37）には、丸柱村立陶器徒弟学校の開設、1923 年（大正 12）には伊賀焼工業組合が設立された。丸柱には、近世の連房式登り窯と近代の伊賀焼生産にかかる建物等が残されており、近世から近代にかけての窯元の姿を知ることができる。

一方で陶芸作家が現れ、伊賀焼の復興にも取り組んだ。とりわけ昭和初期の代議士川崎克は、『伊賀及信楽』を著すほか、1942 年（昭和 17）に完成した俳聖殿（上野丸之内・国重文）の廟堂に当時の彫刻家長谷川栄作の原型をもとに製作し芭蕉翁陶像を安置した。

戦後の伊賀焼は、戦前からの主要製品であった土鍋の需要が増え、1981 年（昭和 56）

に伊賀焼振興協同組合が発足し、翌年、伝統的工芸品に指定された。1991 年（平成３）には丸柱に伊賀焼伝統産業会館が開設され、伊賀焼の魅力を現在に伝えている。毎年９月には、窯元や陶芸作家らが一同に集まる伊賀焼陶器まつりが開催され、伊賀焼ファンでにぎわっている。また、伊賀焼の作家たちで構成される伊賀陶芸会は、旧崇広堂（上野丸之内・国史跡）はじめ、市内外で展示会の開催を重ねている。

３．城下町と村々

3-1　藤堂高虎と上野城下町

上野城下町の歴史は、藤堂高虎が 1611 年（慶長 16）に建設に着手したことに始まる。現在の住所表記が上野丸之内であるところが旧上野城の範囲にあたり、外堀の内側には藩主である藤堂家の一族や、高禄藩士の屋敷が立ち並んでいた。上野城内に所在した建造物としては、1821 年（文政 4）に設置された旧崇広堂（上野丸之内・国史跡）や上野高等学校敷地内にある藤堂藩旧武庫（上野丸之内・市有文）、上野公園内に移築された藤堂家所縁御殿の御門（上野丸之内・市有文）、上級藩士の武家屋敷遺構である成瀬平馬家長屋門（上野丸之内・市有文）が残る。

東西の大手門から南に下る東之立町通と西之立町通は、本町筋（大和街道）、二之町筋、三之町筋（三筋町）と直交して、阿保・名張へと接続していた。東・西之立町通の中間

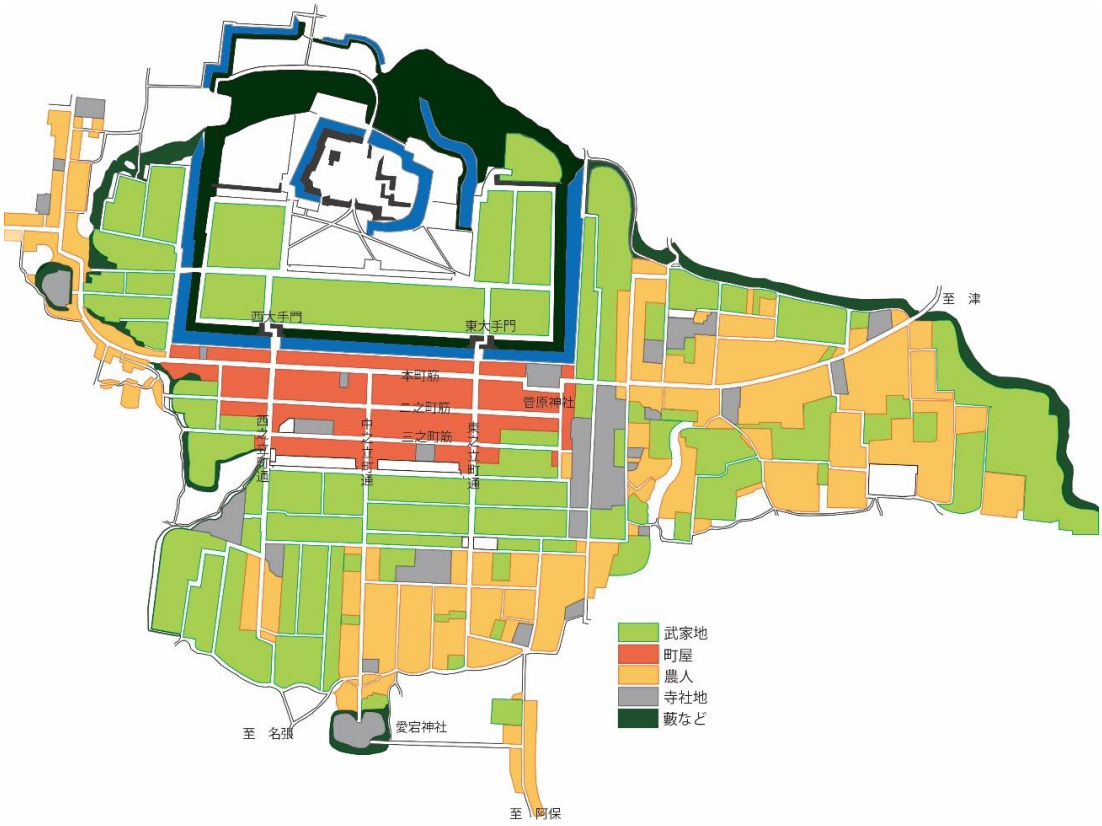


図 22　上野城下町図（伊賀文化産業協会　（正徳 5 年（1716）上野城下町絵図より作成）

にある中之立町通と本町筋の交点は「札之辻」と呼ばれ、城下町の起点となっていて、大正期に建てられた上野町元標が残る。

上野城下町は街路を挟んで両側が同じ町となる両側町である。長方形の街区に間口が狭く奥行の長い、いわゆる「うなぎの寝床」といわれる町家が連なる短冊形の地割で、現在でも町割りや屋敷の地割が踏襲されている。また、町家建築の街道に面した部分では、天井裏の「ツシ」に採光するための「虫籠窓」や「塗り込み窓」と呼ばれる格子窓、寺村家住宅（上野福居町・国登録）の土蔵に見られる「ナマコ壁」などが見られ、町家の伝統的景観を今に伝えている。

町人地である三筋町の外側には忍町・相生町に中下級藩士の屋敷が設定され、入交家住宅（上野相生町・

寺村家住宅（上野福居町・国登録）

札之辻に残る上野町元標
（上野中町・未指定）

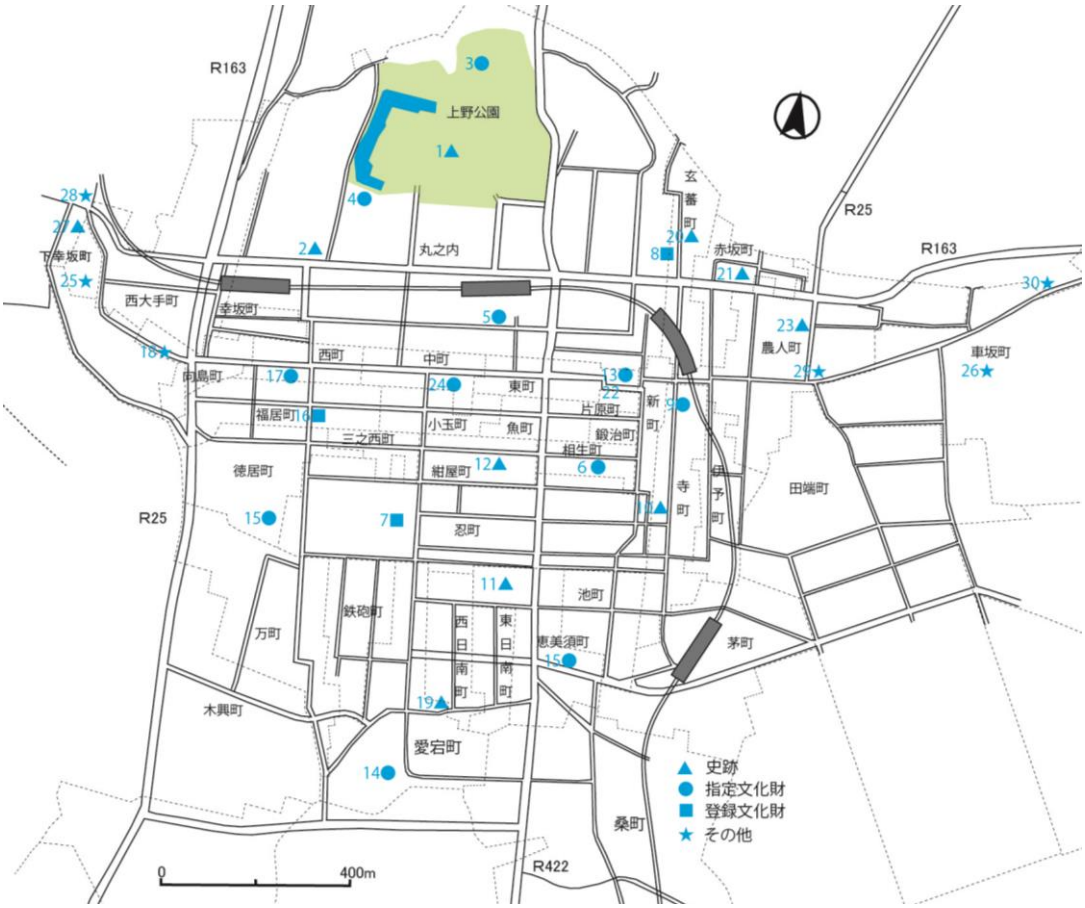


図 23　伊賀市中心市街地における文化財等建造物（近世）

表 21　伊賀市中心市街地における文化財建造物等（近世）の一覧

No	指定区分・種別		名　　称	所在地
1	国	史跡	上野城跡	上野丸之内
2	国	史跡	旧崇広堂	上野丸之内
3	市	有形文化財（建造物）	藤堂家所縁御殿の御門	上野丸之内
4	市	有形文化財（建造物）	藤堂藩旧武庫	上野丸之内
5	市	有形文化財（建造物）	成瀬平馬家長屋門	上野丸之内
6	県 市	有形文化財（建造物） 史跡	入交家住宅主屋･長屋門･表屋･土蔵ほか 入交家	上野相生町
7	国	登録有形文化財（建造物）	赤井家住宅主屋･茶室･土蔵･長屋門･土塀	上野忍町
8	国	登録有形文化財（建造物）	中森家住宅主屋･離れ･前蔵ほか	上野玄蕃町
9	市	歴史資料	藤堂家歴代供養墓所	上野寺町
10	市	史跡	藤堂玄蕃家墓所	上野寺町
11	市	史跡	藤堂新七郎家墓所	上野恵美須町
12	市	史跡	西嶋八兵衛之友墓	上野紺屋町
13	県	有形文化財（建造物）	菅原神社楼門･鐘楼	上野東町
14	県	有形文化財（建造物）	愛宕神社本殿	上野愛宕町
15	県	有形文化財（建造物）	広禅寺転輪蔵	上野徳居町
16	国	登録有形文化財（建造物）	寺村家住宅主屋･前蔵	上野福居町
17	市	有形文化財（建造物）	西町集議所	上野西町
18	未	史跡	黒門跡	上野向島町
19	県	史跡及び名勝	蓑虫庵	上野西日南町
20	市	史跡	さまざま園	上野玄蕃町
21	市	史跡	芭蕉翁生家	上野赤坂町
22	市	史跡	貝おほひ奉納の社	上野東町
23	市	史跡	芭蕉翁故郷塚	上野農人町
24	国	重要無形民俗文化財	上野天神祭のダンジリ行事	上野中町ほか
25	未	史跡	菅原神社西御旅所　安倍神社	上野下幸坂町
26	未	史跡	菅原神社東御旅所	上野車坂町
27	県	史跡	鍵屋の辻	小田町
28	未	史跡	道標　鍵屋の辻	小田町
29	未	史跡	道標　大和街道・伊賀街道分岐	上野農人町
30	未	有形文化財（建造物）	参宮常夜灯	上野車坂町

【上野天神祭関連の文化財】

	県	有形文化財（彫刻）	上野天神祭供奉面	上野三之西町
	県	有形文化財（彫刻）	上野天神祭供奉面	上野紺屋町
	県	有形文化財（彫刻）	上野天神祭供奉面	上野相生町
	市	有形民俗文化財	上野天神祭供奉面･能面	上野徳居町
	県	有形文化財（工芸品）	上野天神祭山車幕	上野鍛冶町
	県	有形文化財（工芸品）	上野天神祭山車金具	上野福居町
	市	有形民俗文化財	上野天神祭鍛冶町楼車前幕	上野鍛冶町
	市	有形民俗文化財	上野天満宮祭礼行列略記版木　附 天神祭礼行列板元掛看板１枚　御用印判師雲禾堂看板１枚	上野西町

図 24　長田地区における藤堂藩関係文化財群

県有文）・赤井家住宅（上野忍町・国登録）・中森家住宅（上野玄蕃町・国登録）が残る。さらにその南側は町人地となっていた。

また、城下町の東側に寺町を配置し、上野城の南東角に藤堂藩主家が費用を下賜し 1704 年（宝永元）に完成した楼門が残る菅原神社（上野東町・県有文）、城下町の南端に、1616 年（元和２）に藤堂高虎が檀主となって建設した本殿が残る愛宕神社（上野愛宕町・県有文）がある。城下町の東に位置する寺町や城下町の各所にある寺院には、藤堂藩主家（上行寺）や藤堂玄蕃家（大超寺）、藤堂新七郎（山渓寺）はじめ、藩士家の歴代の供養塔が残されているほか、町に住まう人びとの弔いの場でもあった。なお、町の人びとの信仰として、各所に見られる稲荷信仰や恵美須町の恵美須神社における１月の「初ゑびす」、８月の地蔵盆行事がいまでも受け継がれている。

上野城下町における秋の一大イベントが、菅原神社の秋の例大祭、上野天神祭ダンジリ行事（上野中町ほか・国重無民）である。城下町の９町の楼車と４町による鬼行列で構成されるダンジリ行事は、10 月第３又は第４日曜日の朝、城下町の東に位置する東の御旅所を出発して三筋町を巡行し、多く観光客が訪れる上野城下町の風物詩となっている。上野天神祭の運営は各町が運営の基本単位となっており、城下町の町家の風情とともに町の伝統を今に伝えている。

なお、このほかにも藤堂藩主にまつわる遺跡が市内各所に残されている。上野城を東に望む丘陵にある長田の西蓮寺には、藩祖藤堂高虎画像（国重文）が残されているほか、城代である藤堂采女家歴代墓所（市史跡）、同家寄進の蓮葉形銅製手水鉢（市有文）などがある、また、西蓮寺のやや北にある常住寺には、1659 年（万治２）、２代藩主藤堂高次が母松寿院の十三回忌に建立した閻魔堂（県有文）や、松寿院供養塔（市史跡）が残る。さらに、その背後に位置する山頂には、遺言により葬られた３代藩主藤堂高久公墓所（県史跡）、通称「長田御山」が残る。このように長田の地は、藤堂家との所縁の深い地区である。

3-2　「仏神崇重ノ国」伊賀

市内の村々を歩くと、いにしえより鎮座する神社や名刹・古刹を見ることができる。古代より、寺社や貴族の杣や荘園の設置を通じて、京都・奈良と直接的な関わりを有していた伊賀国には、仏教関係のさまざまな美術の優品がもたらされてきた。こうした伊賀の人びとの篤い信仰は、戦国時代の興福寺の僧、多聞院英俊に「仏神崇重ノ国」と評され、その心は現在も受け継がれている。

神社の本殿には、戦国の争乱を免れた高倉神社本殿（西高倉・国重文）や、天正期の戦後復興の象徴として建てられた大村神社宝殿（阿保・国重文）や猪田神社本殿（下郡・県指定）がある。また、観菩提寺本堂（島ヶ原・国重文）のように県内最古級の優美な姿を今に伝えるものもある。神社の本殿を見ると、赤色で彩色を施したものが多く、奈良県との共通を見いだすことができる、また、射手神社十三重塔（長田・国重文）はじめ、蓮徳寺（湯屋谷）や安楽寺（青山羽根）の石造十三重塔（いずれも市指定）や阿弥陀寺五輪塔（川東・県有文）、石造宝篋印塔（槙山・市有文）など、石造文化が広まった鎌倉時代の石塔が多くみられるのも本市の特徴である。

また、各所の寺院に平安・鎌倉時代の木造・石造の仏像彫刻が伝えられていることも大きな特徴である。木造彫刻では、白鳳期までさかのぼる木造薬師如来坐像（下友生見徳寺・県有文）をはじめ、西盛寺（三田）や佛土寺（東高倉）、市場寺（菖蒲池）、新大仏寺（富永）などには、阿弥陀如来坐像や薬師如来坐像、十一面観音菩薩立像や日光月光菩薩像、四天王像や不動明王像などがある。石造彫刻では、岩根の磨崖仏（大内・県有文）や中ノ瀬磨崖仏（寺田・県有文）など優品が数多く残されている。さらに、寺院では法会の折に掛けられる涅槃図などの絵画、大般若経や法華経などの経典も伝えられている。

地域の信仰の拠点である神社や寺院では、境内において神仏へ奉納するための神事踊や獅子舞、法会が行われている。これらは、日照りに降雨を願う雨乞い神事として行われたかんこ踊や、疫病退散・厄払い行事として行われている祇園踊、村へ厄災が入らないよう結界を張る伊賀のカンジョウナワ行事（市無民）がある。また、五穀豊穣や家内安全を祈念するため、それぞれの地区で、特徴ある祭礼・神事が伝えられ、今も年中行事として人びとの生活の一部となっている。こうした民俗行事も近畿地方との共通性が指摘されていて、伊賀の文化が連綿と近畿地方との関わりのなかで醸成されてきたことを窺うことができる。

以下では、こうした伊賀の寺社と村の信仰をめぐる歴史文化のありようのいくつかの事例を紹介する。

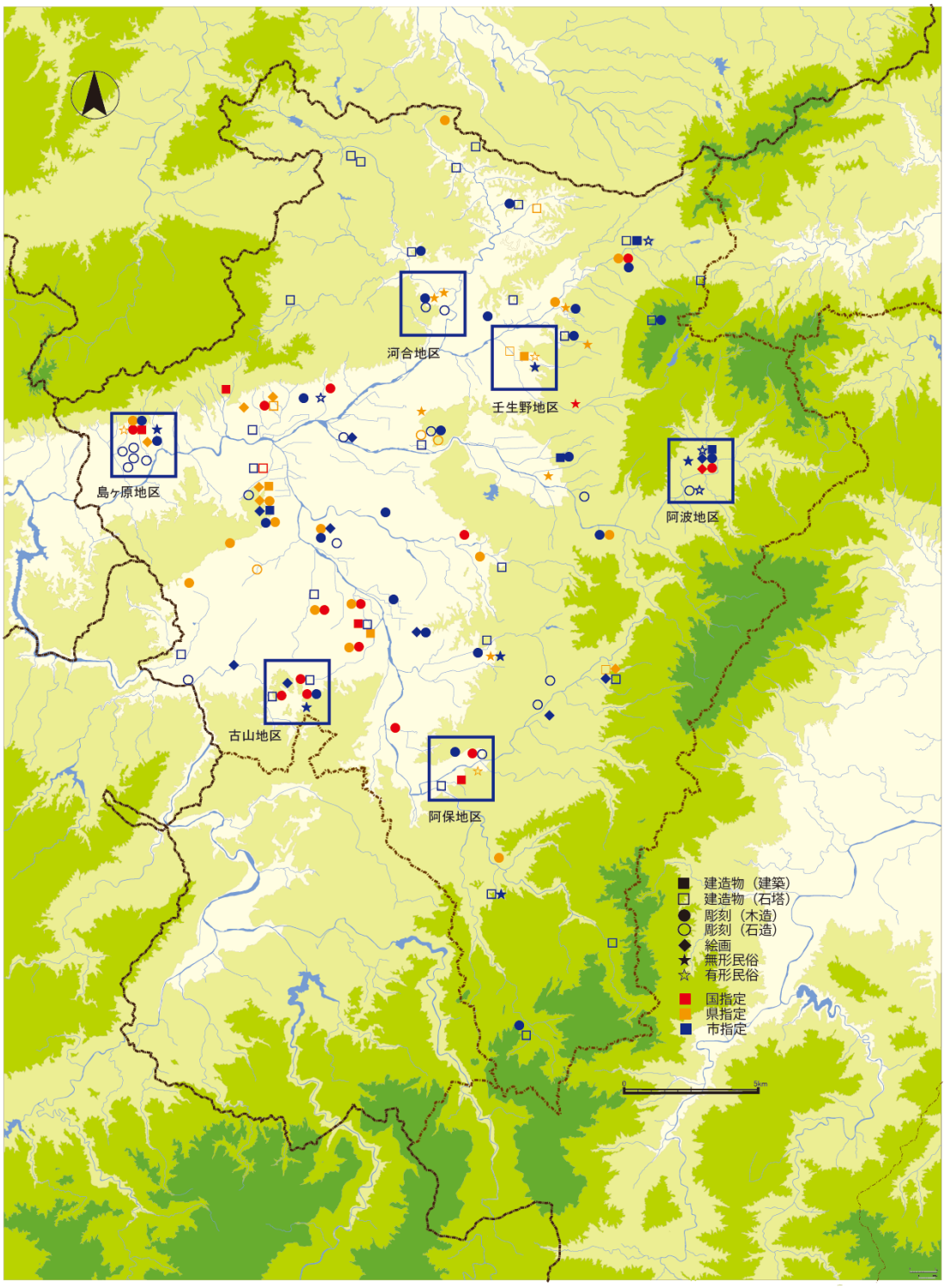


図 25　寺社と村の信仰関係の文化財（寺社建造物、仏像彫刻、絵画、祭礼・神事）

【島ヶ原地区】

京都府・奈良県・滋賀県と接する島ヶ原地区にあり、正月堂の名で知られる観菩提寺には、県内最古級の室町時代に建立された本堂・楼門がある。本堂内には秘仏の本尊木造十一面観音立像が安置され、楼門には木造の多聞天・広目天立像、金剛力士像が置かれて寺域を護っている。また、毎年２月 11 日には大きな餅を担いだ行列が頭屋宅から本堂へ練り込む大餅会式、翌 12 日には「達陀の行法」による御行結願法要が行われ、「正月堂の修正会」として地域の一大行事となっている。

観菩提寺に近接する西念寺には、天台真盛宗の宗祖、真盛上人供養塔があるほか、1564 年（永禄 7）の銘のある阿弥陀石仏や、鎌倉時代の絹本着色仏涅槃図が伝わる。また、鷽宮神社では 12 月に行われる秋祭で４頭の獅子による獅子踊が奉納される。

図 26　島ヶ原地区における村の信仰関係の主な文化財（寺社建造物、仏像彫刻、絵画、祭礼・神事）

表 22　島ヶ原地区における村の信仰関係の主な文化財一覧

No	指定区分・種別		名　　称	時代	所在地
1	国	重要文化財（建造物）	観菩提寺本堂	室町	観菩提寺
2	国	重要文化財（建造物）	観菩提寺楼門　附棟札	室町	観菩提寺
3	国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	平安	観菩提寺
4	県	有形文化財（彫刻）	木造聖観音立像	平安	観菩提寺
5	県	有形文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	平安	観菩提寺
6	県	有形文化財（彫刻）	木造多聞天立像	平安	観菩提寺
7	県	有形文化財（彫刻）	木造広目天立像	平安	観菩提寺
8	県	有形文化財（彫刻）	木造天部形立像（伝梵天像・伝帝釈天像）	平安	観菩提寺
9	県	有形文化財（彫刻）	木造十一面観音菩薩立像	平安	観菩提寺
10	県	有形文化財（工芸品）	鰐口	室町	観菩提寺
11	市	有形文化財（彫刻）	十三重石塔	鎌倉	観菩提寺
12	市	有形文化財（工芸品）	本尊厨子鎖子	江戸	観菩提寺
13	市	有形文化財（書跡・典籍・古文書）	観菩提寺観世音開帳縁記文書	江戸	観菩提寺
14	市	有形文化財（絵画）	観菩提寺の古絵図	室町	個人
15	市	有形文化財（彫刻）	金剛力士像	室町	観菩提寺
16	市	有形文化財（彫刻）	賓頭慮尊者寄木造半跏坐像	室町	観菩提寺
17	市	有形文化財（彫刻）	六斎念仏供養四角型石灯	江戸	観菩提寺
18	市	有形文化財（彫刻）	六斉念仏供養四角型石灯	江戸	観菩提寺
19	市	有形文化財（彫刻）	石燈籠　附由来文書	江戸	鸕宮神社
20	市	有形文化財（彫刻）	四角燈籠	江戸	鸕宮神社
21	県	無形民俗文化財	正月堂の修正会	－	観菩提寺
22	市	無形民俗文化財	獅子踊	－	鸕宮神社
24	市	無形民俗文化財	太鼓踊り	－	鸕宮神社
25	県	有形文化財（絵画）	絹本着色仏涅槃図	室町	西念寺
26	市	有形文化財（彫刻）	阿弥陀石仏	室町	西念寺
27	市	有形文化財（彫刻）	真盛上人供養塔	室町	西念寺

【古山地区】

市中西部に位置する古山地区には、優れた仏像彫刻が数多く残る。菖蒲池の市場寺には、本尊木造阿弥陀如来坐像を護る持国天・増長天・多聞天・広目天の木造四天王像があり、県内最高水準の木造彫刻とされる。また、東谷の観音寺には、本尊木造阿弥陀如来坐像と脇侍に不動明王像、毘沙門天像が置かれる。さらに、湯屋谷の蓮徳寺にある木造日光・月光菩薩立像は、市内でも少ない日光・月光像で、優美な姿を今に伝える。この蓮徳寺には南北朝期の十三重塔が完存し、古くからこの地が篤い信仰の地であったことがわかる。

地区の中心にある蔵縄手の田守神社で行われる秋祭は、祭神を神社西方にある御旅所へ迎える神事で、鬼・母衣花・大御幣・神輿・獅子舞などで構成された行列や獅子神楽の奉納、舞姫の舞や祝詞奏上などを行った後、祭礼の終了と感謝を奉告する貴箸神事という箸投げ神事が行われる。

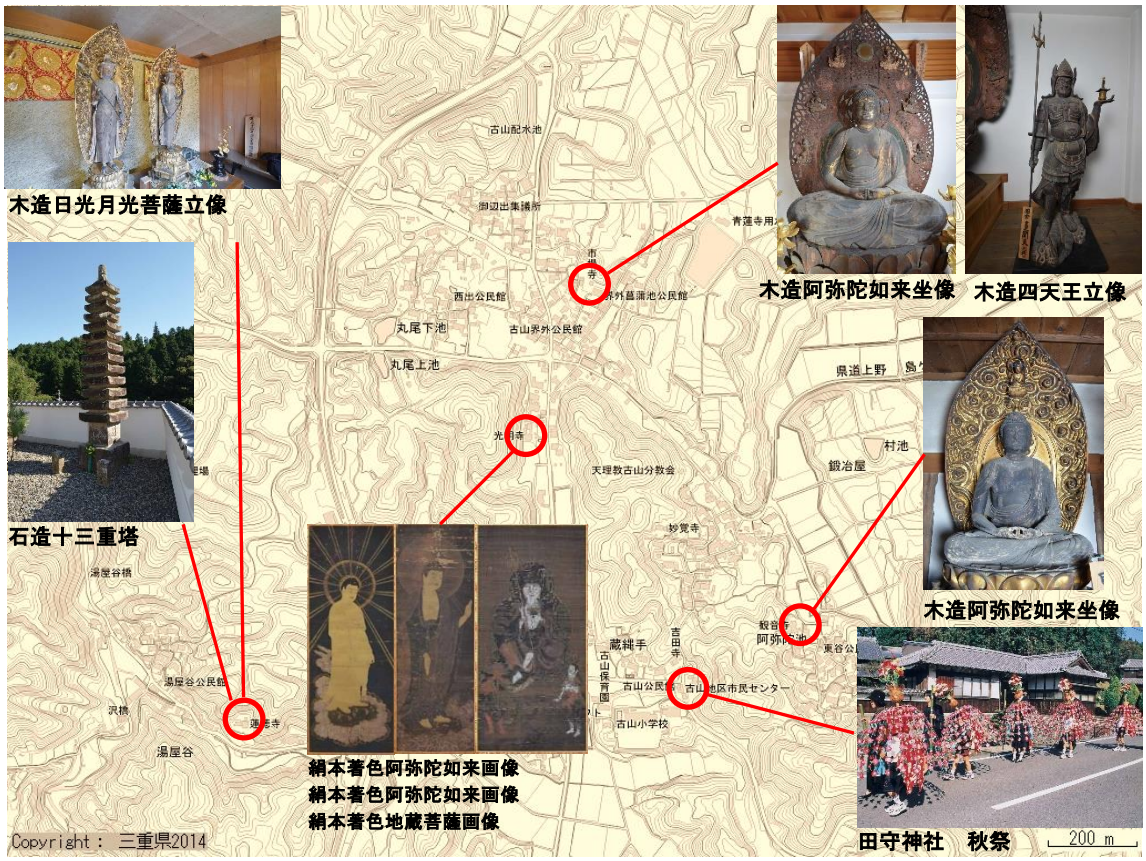


図 27　古山地区における村の信仰関係の主な文化財（寺社建造物、仏像彫刻、絵画、祭礼・神事）

表 23　古山地区における村の信仰関係の主な文化財一覧

No	指定区分・種別		名　　称	時代	所在地
1	国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	平安	市場寺
2	国	重要文化財（彫刻）	木造四天王立像	平安	市場寺
3	国	重要文化財（彫刻）	木造阿弥陀如来坐像	鎌倉	観音寺
4	国	重要文化財（彫刻）	木造日光月光菩薩立像	平安	蓮徳寺
5	市	有形文化財（建造物）	石造五輪塔	南北朝	市場寺
6	市	有形文化財（建造物）	石造十三重塔	南北朝	蓮徳寺
7	市	有形文化財（絵画）	絹本著色阿弥陀如来画像　絹本著色阿弥陀如来画像　絹本著色地蔵菩薩画像	室町	光明寺
8	市	有形文化財（彫刻）	木造不動明王像	鎌倉～南北朝	観音寺
9	市	有形文化財（彫刻）	木造毘沙門天立像	鎌倉～南北朝	観音寺
10	市	無形民俗文化財	田守神社　秋祭	－	田守神社
11	市	無形民俗文化財	伊賀のカンジョウナワ行事	－	菖蒲池・東谷

【阿波地区】

市東部に位置する阿波地区の富永には、源平の争乱で焼失した東大寺を復興するため俊乗坊重源が全国７カ所に設けた別所の一つ、伊賀別所に起源をもつ新大仏寺がある。ここには、木造如来坐像と石造基壇、木造俊乗上人坐像、絹本著色興正菩薩像など、鎌倉時代の貴重な文化財が数多く伝えられている。また、近世には大仏殿が再建されて雨乞いの祈願所として広く知られ、雨乞い行事に使用した用具類も残されている。さらに、下阿波の阿波神社には近世初頭にさかのぼる貴重な石造狛犬や「文禄五年丙申（1596）八月日施主敬白」の銘文が確認できる鰐口が伝わる。

そのほか、富永では、毎年２月に五穀豊穣と健康を願って的へと矢を放ち、中心の黒丸に当たれば、その年の豊作が期待される神事、的祭が行われている。

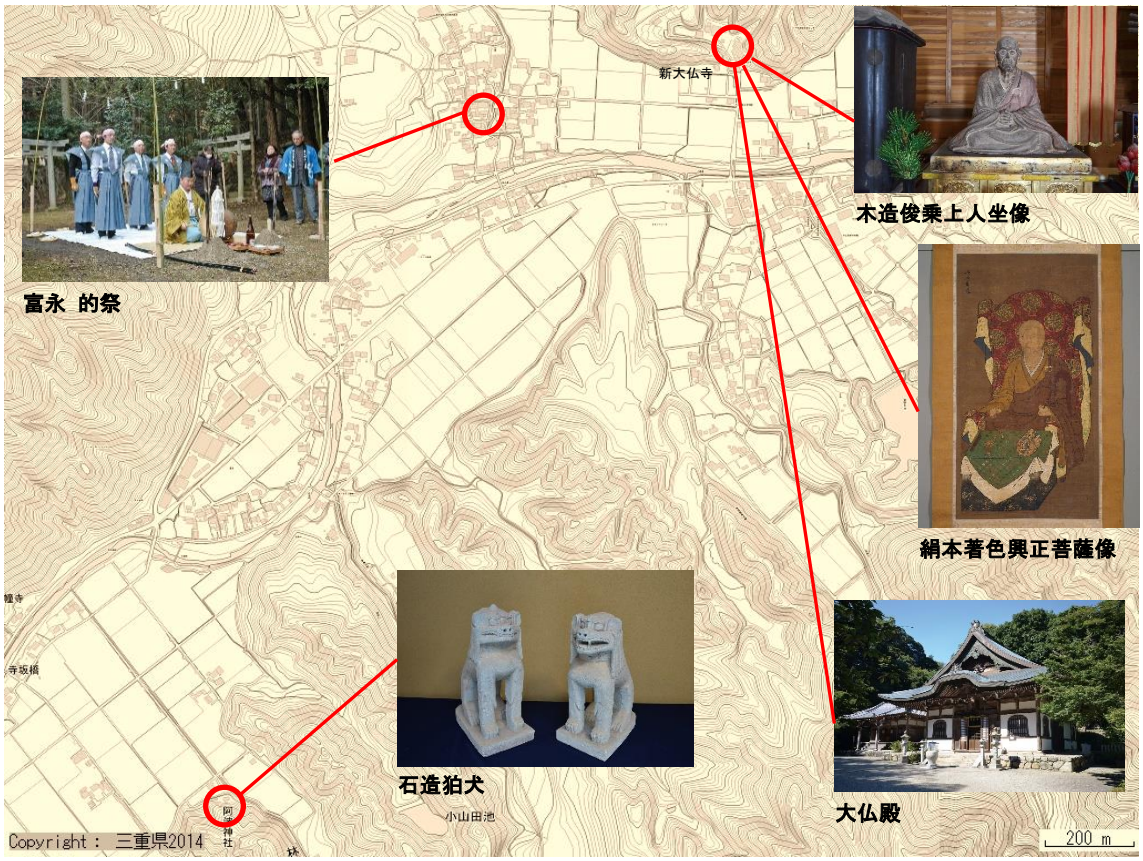


図 28　阿波地区における村の信仰関係の主な文化財（寺社建造物、仏像彫刻、絵画、祭礼・神事）

表 24　阿波地区における村の信仰関係の主な文化財一覧

No	指定区分・種別		名　　称	時代	所在地
1	国	重要文化財（絵画）	絹本著色興正菩薩像	鎌倉	新大仏寺
2	国	重要文化財（彫刻）	木造俊乗上人坐像	鎌倉	新大仏寺
3	国	重要文化財（彫刻）	木造僧形坐像	鎌倉	新大仏寺
4	国	重要文化財（彫刻）	木造如来坐像　附石造基壇	鎌倉	新大仏寺
5	国	重要文化財（考古資料）	板彫五輪塔	鎌倉	新大仏寺
6	県	有形文化財（工芸品）	水晶舎利塔	鎌倉	新大仏寺
7	市	有形文化財（建造物）	大仏殿	江戸	新大仏寺
8	市	有形文化財（絵画）	絹本着色弘法大師像	江戸	新大仏寺
9	市	有形文化財（絵画）	絹本着色不動明王像	江戸	新大仏寺
10	市	有形文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	室町	新大仏寺
11	市	有形文化財（彫刻）	木造地蔵菩薩立像	室町	新大仏寺
12	市	有形民俗文化財	新大仏寺雨乞い関係文書 附　雨乞い踊り用具	江戸	新大仏寺
13	市	有形文化財（工芸品）	鉄製鰐口	織豊	阿波神社
14	市	有形文化財（彫刻）	石造狛犬	江戸	阿波神社
15	市	有形文化財（彫刻）	石造狛犬	－	阿波神社
16	市	有形民俗文化財	猿野の祇園踊り図絵馬	大正	葦神社
17	市	無形民俗文化財	富永的祭	江戸～	―

【阿保地区】

市南部に位置する阿保地区には、武甕槌命が鹿島神宮を発ち、大和国春日山に遷座する際に立ち寄ったとされる大村神社が所在する。地震を鎮めるという「要石」が伝来し、人びとの篤い信仰を集めている。境内の一角にある虫喰鐘は、かつての神宮寺である禅定寺の名残で、1656 年（明暦 2）に依那具村の鋳工、藤原勘右衛門により鋳造されたことが刻まれている。また、寺脇には西大寺流律宗の寺院であった宝厳寺が所在する。中世以来の信仰の拠点で、室町時代の五輪塔や石仏が多数残されているほか、隣接する安田中世墓の発掘調査では蔵骨器が見つかっている。本尊木造十一面観音立像は、明治維新後の神仏分離政策により、禅定寺からもたらされたものである。

そのほか、柏尾には 1273 年（文永 10）銘のある金属製懸仏や 1585 年（天正 13）から 1899 年（明治 32）にかけての頭番帳が伝わり、織豊期以来、当屋渡しの行事が続けられている。

図 29　阿保地区における村の信仰関係の主な文化財（寺社建造物、仏像彫刻、工芸品、祭礼・神事）

表 25　阿保地区における村の信仰関係の主な文化財一覧

No	指定区分・種別		名　　称	時代	所在地
1	国	重要文化財（建造物）	大村神社宝殿　附棟札３枚	織豊	大村神社
2	国	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音立像	平安	宝厳寺
3	県	有形民俗文化財	柏尾頭番帳	織豊～明治	柏尾地区
4	市	有形文化財（建造物）	石造十三重塔	鎌倉	安楽寺
5	市	有形文化財（建造物）	石造五輪塔	室町	安楽寺
6	市	有形文化財（彫刻）	宝厳寺石仏群	室町	宝厳寺
7	市	有形文化財（工芸品）	金属製懸仏	鎌倉	柏尾地区
8	市	有形文化財（工芸品）	磬・磬台	室町～江戸	宝厳寺
9	市	有形文化財（工芸品）	大村神社梵鐘	江戸	大村神社
10	市	有形文化財（考古資料）	安田中世墓出土蔵骨器	鎌倉～室町	

【壬生野地区】

市東部に位置する壬生野地区には、武甕槌命が鹿島神宮を発ち、大和国春日山に遷座する際に立ち寄ったとされる川東の春日神社が所在し、隣接して神宮寺であった春日寺がある。春日神社は近世に造替された５基の本殿と、15 世紀にさかのぼる県内最古級の拝殿がある。ここは、中世壬生野郷の鎮守として地域の信仰の拠点であり、そのことを示す古文書群や獅子神楽、雨乞願解絵馬が伝わる。滝川を挟んだ対岸にある阿弥陀寺には、中世に西大寺の末寺であった大聖寺の遺物とされる鎌倉期の大型五輪塔が残るほか、中世の石造物が多数残されている。また、川東は市内でも中世城館が集落内に多く残る地域であり、今も往時の景観を留めている。

なお、壬生野地区内の東部に位置する山畑の勝手神社では、神事踊が毎年秋に奉納される。風流踊に属する雨乞いのかんこ踊りで、色とりどりの花を付けたオチズイを背負った踊り子、胸に付けた鞨鼓を弾きながらゆったりとした調子の踊りでユネスコ無形文化遺産に登録されている。

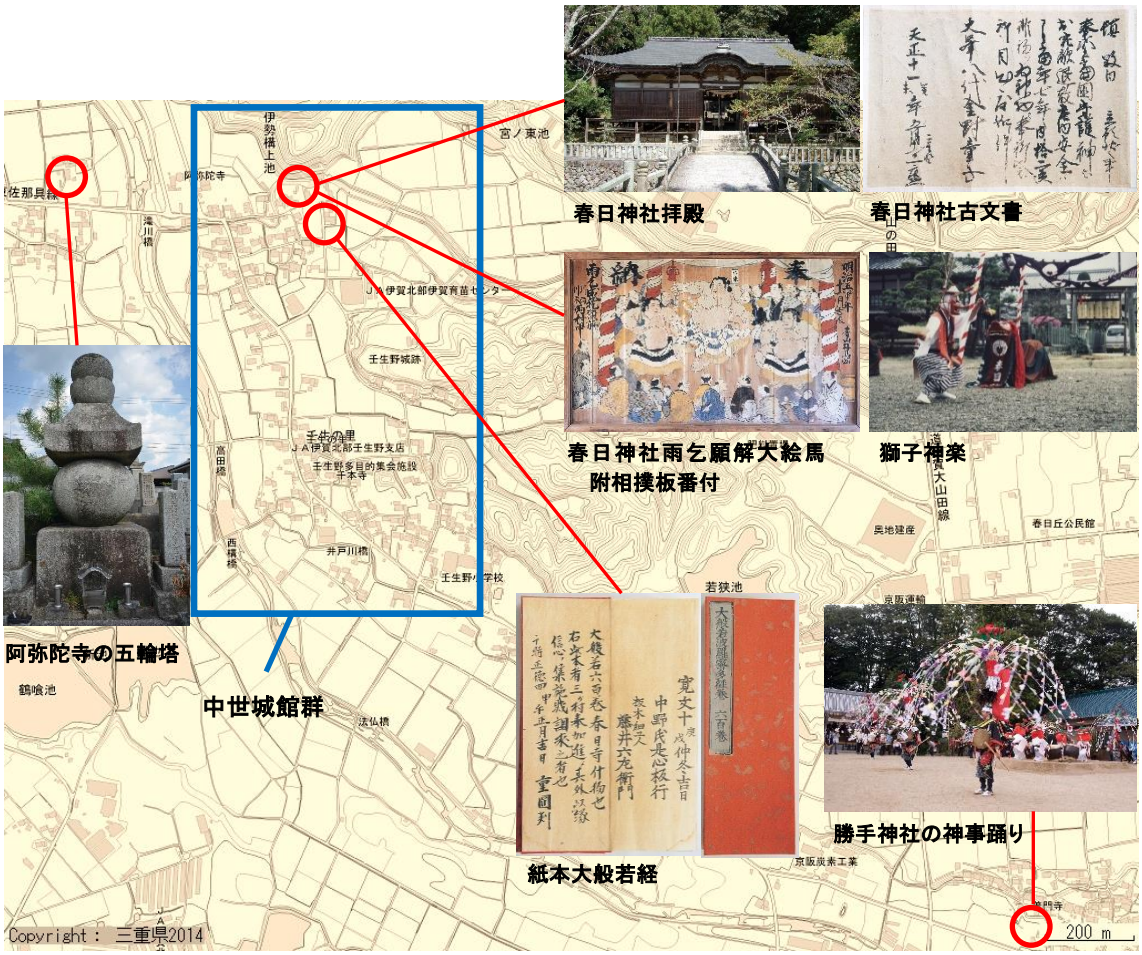


図 30　壬生野地区における村の信仰関係の主な文化財（寺社建造物、絵画、祭礼・神事）

表 26　壬生野地区における村の信仰関係の主な文化財一覧

NO	指定区分・種別		名　称	時代	所在地
1	国	重要無形民俗文化財 国選択文化財	勝手神社の神事踊	江戸～	山畑
2	県	有形文化財建造物	春日神社拝殿	室町	春日神社
3	県	有形文化財建造物	阿弥陀寺の五輪塔	鎌倉	阿弥陀寺
4	県	有形民俗文化財	春日神社雨乞願解大絵馬　附相撲板番付	江戸	春日神社
5	市	有形文化財 （書跡･典籍･古文書）	伊賀国無足人帳	江戸	個人
6	市		春日神社古文書	織豊	春日神社
7	市		紙本大般若経	江戸	春日寺
8	市		勝手神社の棟札	室町	勝手神社
9	市	無形民俗文化財	獅子神楽	－	春日神社
10	市	史跡	壬生野城跡	室町	川東

【河合地区】

市北東部に位置する河合地区の中心には、古くは河合の牛頭天王と呼ばれ、河合地区一帯の信仰を集めた馬場の陽夫多神社が所在する。境内では、毎年８月１日に病気平癒・家内安全の願懸けを解くための行事、祇園祭の願之山行事が行われる。幼児６組 12 名で行う小踊りと、オチズイを背に付けた青年の踊り子６名で行う大踊りからなり、文禄年間（1592～1596）までさかのぼるものとされる。また、大江区の区民により春祭りの際には羯鼓踊りが奉納されてきた。背中にオチズイを背負い、頭に山鳥の尾を付けて踊る神事で、寛永年間（1624～1643）から行われてきたものである。なお、陽夫多神社には 1667 年（寛文７）の銘のある梵鐘がある。

また、川合大江地区にある石立寺には、雨乞いの神事をつかさどるとして信仰された木造夜叉明王坐像があるほか、巨石の中央上に六地蔵立像を彫りこんだ磨崖仏がある。さらに、石川の穴石神社には 1620 年（元和６）に河合郷の河合重種らが奉納したことがわかる木造狛犬や、1359 年（延文４）の造立銘のある宝篋印塔が残されている。

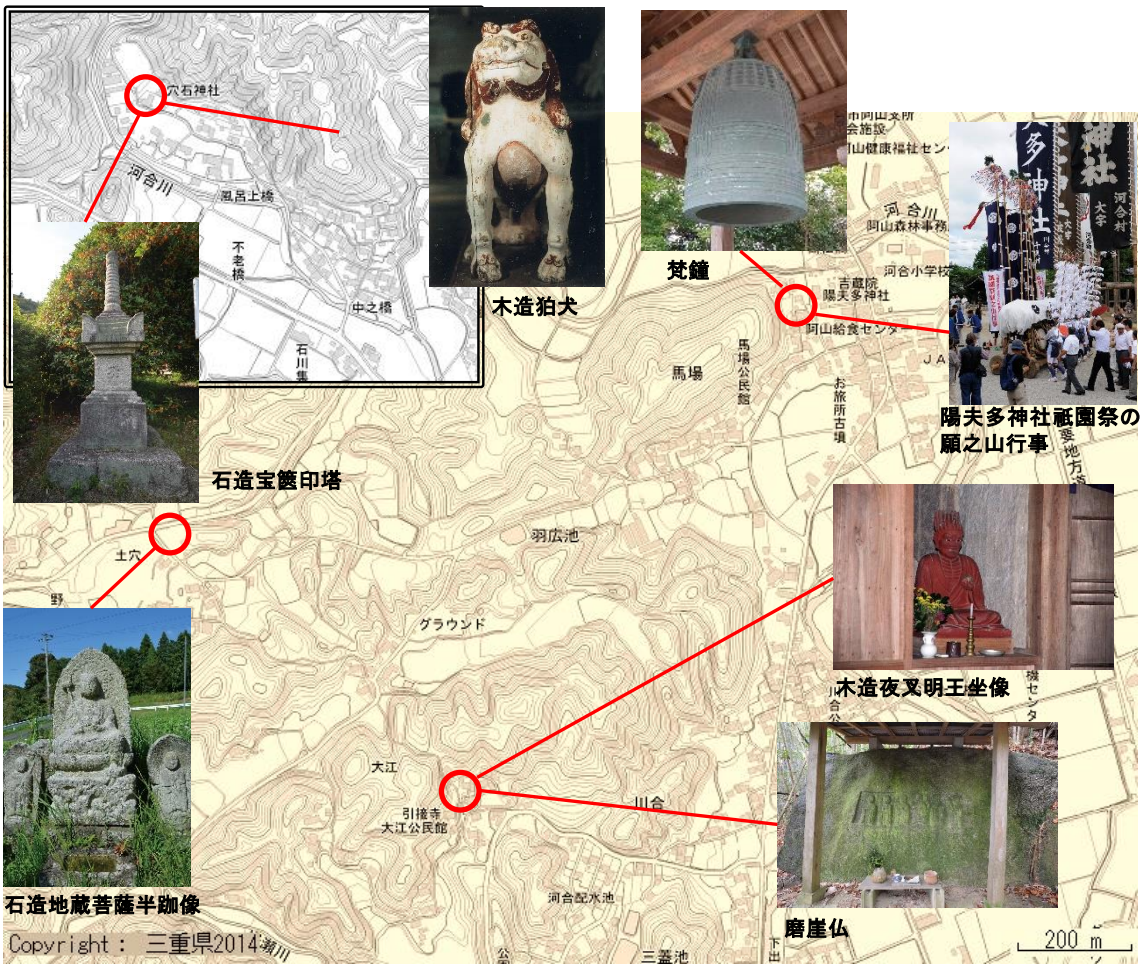


図 31　河合地区における村の信仰関係の主な文化財（寺社建造物、仏像彫刻、絵画、工芸品、祭礼・神事）

表 27　河合地区における村の信仰関係の主な文化財一覧

No	指定区分・種別		名　　称	時代	所在地
1	県	無形民俗文化財	陽夫多神社祇園祭の願之山行事	織豊～	馬場
2	県	無形民俗文化財	大江の羯鼓踊り	江戸～	川合(大江)
3	市	有形文化財（建造物）	石造宝篋印塔	南北朝	石川
4	市	有形文化財（彫刻）	磨崖仏	室町	川合(大江)
5	市	有形文化財（彫刻）	木造夜叉明王坐像	江戸	川合(大江)
6	市	有形文化財（彫刻）	木造狛犬	江戸	石川
7	市	有形文化財（彫刻）	石造地蔵菩薩半跏像	南北朝	川合
8	市	有形文化財（工芸品）	梵鐘	江戸	馬場
9	市	有形文化財（考古資料）	将軍塚遺跡出土品	室町	川合

４．時間と空間が交差するところ「伊賀」

4-1　古琵琶湖層群と伊賀の自然

新第三紀鮮新世の約 400 万年前にさかのぼる古琵琶湖の原形は、大山田湖から阿山湖、甲賀湖、堅田湖を経て現在の琵琶湖へと北へ移動し、堆積した地層は「古琵琶湖層群」と呼ばれ、市域では古い順に上野・伊賀・阿山の各層が堆積している。古琵琶湖層群に堆積したのが伊賀焼に欠かせない耐火性の高い粘土であるが、そこには当時の環境を知ることができる化石も多く見つかっている。

約 260 万年前の第四紀更新世に入り、北部の木津川断層や東部の頓宮断層など、盆地を形成する活断層によって沈降や隆起を繰り返したことにより、現在の伊賀盆地の地形が形成された。

伊賀に住む人びとの歴史の経過とともに自然環境が大きく改変されてきた。しかし、市域には古琵琶湖層群に残る有史以前の生物の化石や、特別天然記念物オオサンショウウオをはじめ、人びとの開発を免れた豊かな自然環境が遺されている。本市東部の布引山系の山頂付近は室生赤目青山国定公園に指定されており、伊賀盆地は自然の宝庫でもある。

ミエゾウの切歯の化石

服部川河川敷（平田）のミエゾウの足跡化石

古琵琶湖層群と古生物　古琵琶湖層群からは、メタセコイア　ハンノキ、ブナなどの植物化石、ハムシなどの昆虫化石、コイ・スッポン・ワニなどの動物化石、イガタニシ・ドブガイなどの貝化石が産出している。なかでも有名なのがミエゾウの化石である。ミエゾウは、平田の服部川河床で臼歯、小杉で切歯、御代で切歯の一部が産出しているほか、服部川河床で足跡化石も見つかっている。

古琵琶湖層群から産出した動植物の化石からは当時の様子を知ることができる。

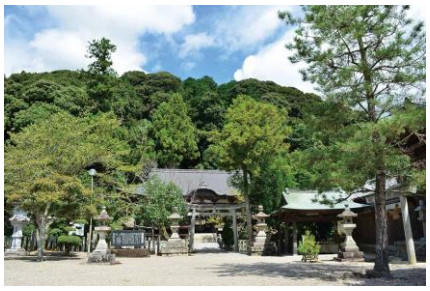
豊かな植生　本市の東西約 30 ㎞、南北約 40Km の盆地地形のなかには、標高 700m を超える霊山から笠取山、青山高原に連なる東部・南部の山地や低丘陵の里山とその間にある小盆地、古琵琶湖層群の砂礫とシルトの互層によりできた湿地などがある。

標高 500m を超える山地では、落葉広葉樹林を代表する奥山愛宕神社のブナ原生林（県天然）や、霊山のイヌツゲとアセビ群生地（県天然）が見られる。なお、アセビ群落は青山高原にも見られる。

生活圏に近い里山は、人びとの活動とともに植生は変化をし続けてきたが、そうし

た中で原植生に近い状態が見られるのが、神域として維持されてきた社叢である。例えば、シイを中心とする常緑広葉樹林で自然の状態に近い春日神社の社叢（川東・市天然）のほか、敢国神社や高倉神社、岡八幡宮などではシイ類やカシ類、ヒノキ、ツバキなどが繁茂し、岡八幡宮ではイチイガシ（白樫・市指定）、高倉神社にはシブナシガヤ（西高倉・国天然）の高木がある。そのほかにも、ヒノキやツブラジイなどの常緑広葉樹からなる比々神社社叢やスギ、ヒノキを中心とする大村神社社叢もあり、それぞれの地域の中では注目される植生となっている。

また、盆地地形である本市には農業用のため池が多くあり、それに続く湿原も各所に見られる。湿地の植物としては、サギスゲやオニスゲ、モウセンゴケ、ヒナノカンザシ、ミツガシワなどがある、このうち下神戸のサギスゲやミツガシワ（下神戸・市指定）の自生地は自然の状態に近い湿地の一つである。



春日神社の社叢

ミツガシワ

盆地の希少生物　木津川の上流域に位置する伊賀の清流を象徴するのが国の特別天然記念物である世界最大の両生類オオサンショウウオである。本市では、木津川と服部川の上流域で確認されることが多く、木津川の上神戸より上流域、阿保地区や上津地区、服部川の平田より上流域、山田地区や阿波地区で見られる。また、木津・服部・柘植川の合流点付近まで散発的であるが生息が確認される。さらに、確認例は少ないが北部の河川でも確認されている。また、サンショウウオ科では、ヒダサンショウウオやカスミサンショウウオなども確認されている。

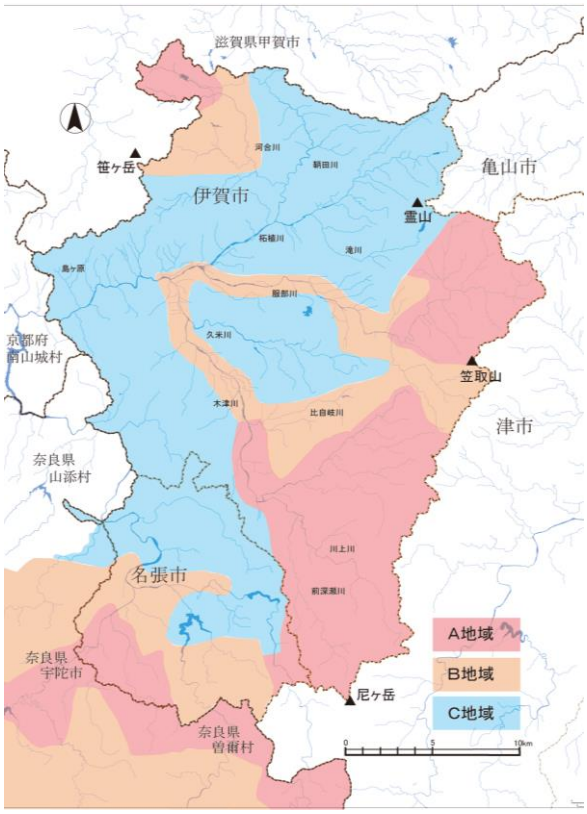


図 32　オオサンショウウオの生息状況にかかる地域区分図

また、鳥類ではオオタカやクマタカ、淡水魚ではアメドジョウ、カワ

バタモロコなども確認されている。

昆虫類では、ヤンマ科のルリボシヤンマ、ゲンゴロウ科のマダラシマゲンゴロウなどをはじめ、湿原性の種が比較的多く、また、トンボ科のナニワトンボやアゲハチョウ科のギフチョウ（市指定）など、里山環境に依存する種が現在も確認されている。

4-2　遺跡の宝庫、伊賀

東西交通の要衝であり、かつての都であった奈良・京都に近い本市には、古墳や寺院跡などの遺跡が多数分布する。

現在の奈良県に成立したヤマト王権は、その勢力を東へ拡大するにあたり、東国への入口ともいえる伊賀の豪族と緊密な関係を結ぼうとした。その表れが全長 188mの県下最大の前方後円墳御墓山古墳（佐那具町・国史跡）であり、市域の各所には地域の王墓である前方後円墳が 16 基確認されており、県下でも 3 番目に多い。また、6 世紀前半から出現する直径 20m内外の後期古墳は、市内に 1,000 基以上も確認されていて、県下でも有数の数を誇る。今でも人びとの生活領域である里山の木立のなかに、こんもりとした姿や横穴式石室を有する古墳を見ることができる。

飛鳥・奈良時代の遺跡には、白鳳時代に建立された三田廃寺（三田）や鳳凰寺跡（鳳凰寺・県史跡）、財良寺跡（才良・市史跡）がある。これらの寺院では、平城京のあった奈良の大寺院と類似した文様の瓦が出土し、都と深い関わりがあったことがわかる。また、聖武天皇の詔により全国に建てられた国分二寺（伊賀国分寺跡と長楽山廃寺跡（国分尼寺）、いずれも国史跡）、古代伊賀の中心地であった伊賀国庁跡（坂之下・国史跡）などもある。奈良時代の国庁跡と国分寺跡が、その規模が明らかで壊されることなく残されているのは全国的にも貴重である。

御旅所古墳の横穴式石室

また、中世の寺院跡や経塚、城館跡が多数所在するのも特徴である。中世の寺院跡は中世墓が一体となって所在する例があり、霊山山頂遺跡（下柘植・県史跡）はじめ、比自山観音寺跡（長田）、楽音寺跡（坂之下）などがある。また、室町時代の史料に登場する菩提寺跡（荒木）や安国寺跡（三田）などもある。

三田廃寺の瓦

市内の各所で見られる中世城館跡は、伊賀地域（本市・名張市）で 650 カ所以上あり、全国で最も濃密に分布する。

こうした遺跡は、江戸時代の人びとにも認識されていて、御墓山古墳は 1763 年（宝暦 13）成立の『三国地志』に「御墓山」の名前で陵墓として記載され、車塚（荒木・県史跡）は「車塚山」として記されている。また、伊賀国分寺跡は、「長者屋敷」

という字名が示すように、寺院であることが人びとの記憶から消えたのちも、いにしえは長者が住まうほどの広大な屋敷として意識されていた。

1970 年代後半から開発事業に伴い事前に発掘調査が実施されることになり、伊賀の遺跡、埋蔵文化財の姿が明らかになってきた。各所で発見される住居や建物の痕跡や出土遺物から、伊賀地域は東海地方の要素を含みながら、近畿地方の影響を強く受けていることがより鮮明になった。また、城之越遺跡（比土・国名勝及び史跡）のように水を巡る祭祀の研究の端緒となった遺跡の発見や、下郡遺跡（下郡）のように貴重な木簡（市有文）の出土例もあった。市内各所の里山や集落の身近なところには、古墳や城館跡があり、地中には新たな歴史の発見が埋もれている可能性がある。

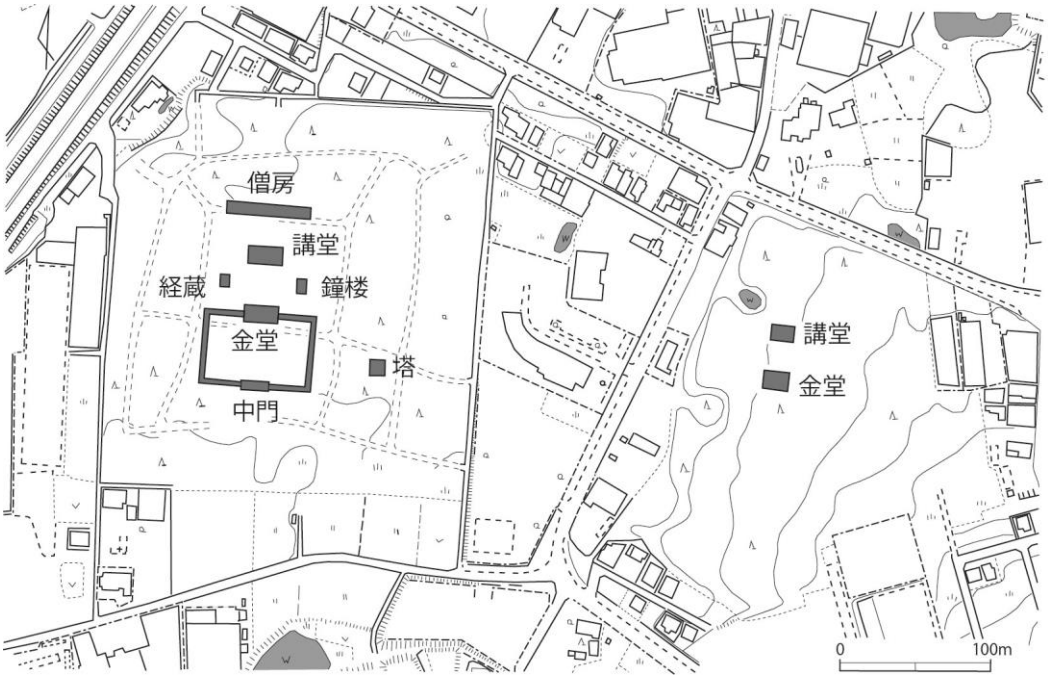


図 33 伊賀国分寺跡・長楽山廃寺跡

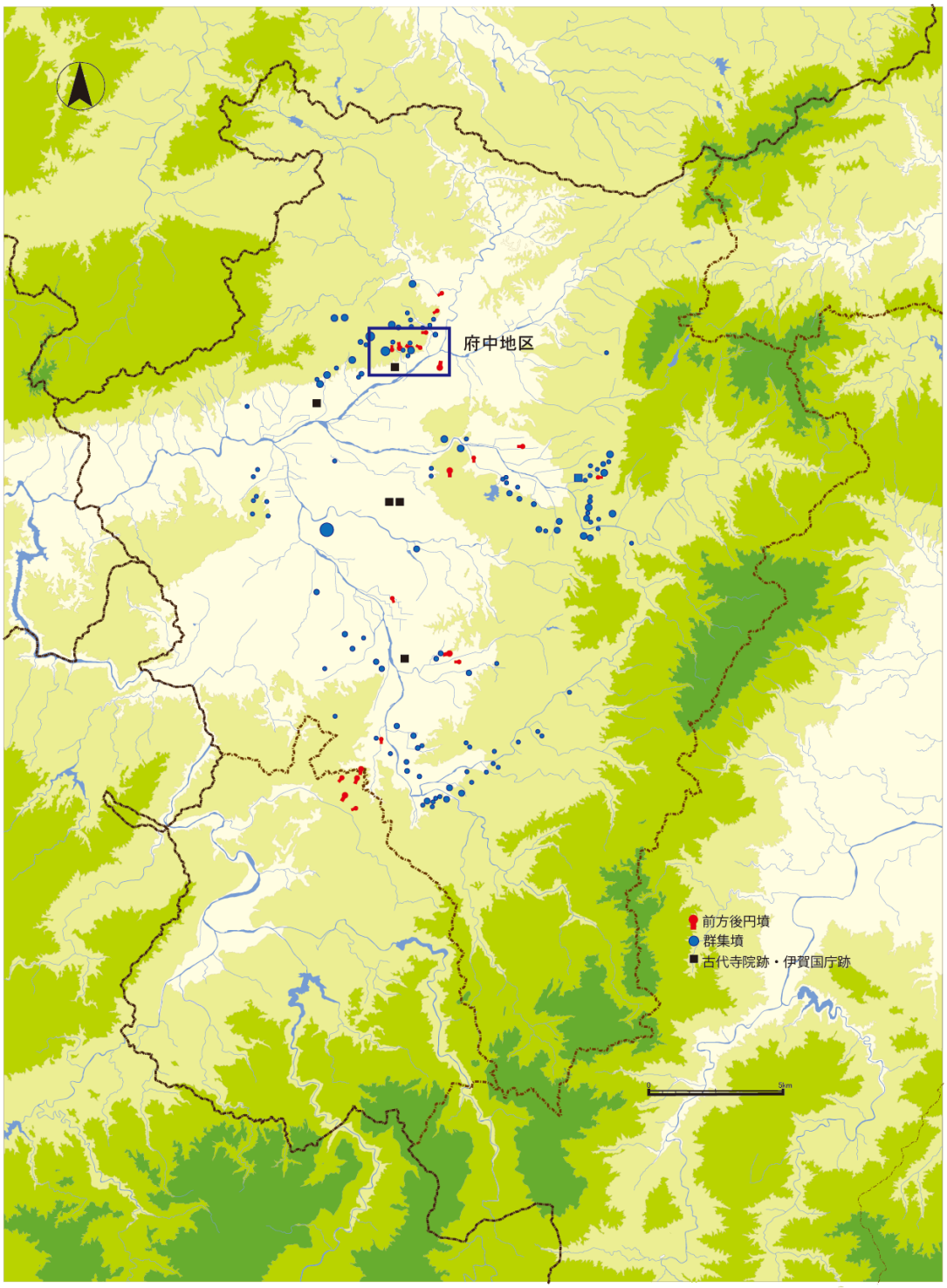


図 34　古墳と古墳群の分布と飛鳥・奈良時代の主な遺跡

【いにしえの伊賀の中心、府中地区】

県下有数の遺跡の密度の高さを誇る本市のなかでも、市北東部に位置する府中地区は、特に遺跡が濃密に分布する地区である。三重県最大の前方後円墳である御墓山古墳（全長 188m）や外山１号墳（全長 62m）、鷺棚１号墳（全長 59m）など４基の前方後円墳があるほか、巨石を用いた横穴式石室のある勘定塚、銅製四獣鏡や銅釧、勾玉、武具など豊富な副葬品が出土した東条１号墳など、首長墓を含む古墳が数多く所在する。また、奈良時代後半には、「府中」の地名の由来である伊賀国庁跡が設置され、平安時代後期まで伊賀国の政治的中心地として機能した。また、南北朝時代に守護仁木氏が拠点とし、城跡の遺構が残る楽音寺跡があるほか、戦国時代の中世城館も多数分布する。府中地区では古墳から古代、中世にいたる移り変わりを知ることができる。

図 35　伊賀国庁跡と古墳

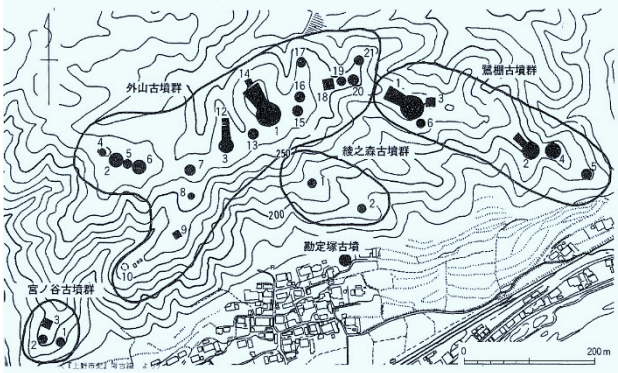


図 36　外山・鷺棚古墳群分布図

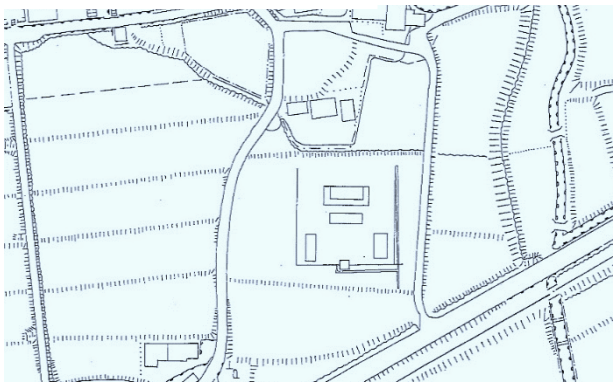


図 37　伊賀国庁跡

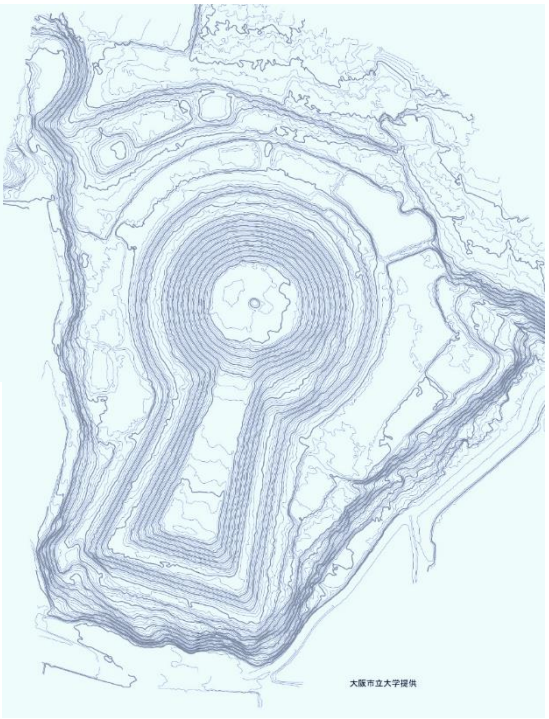


図 38　御墓山古墳測量図

4-3　東西を結ぶ道と伊賀八宿

紀伊半島のほぼ中央、近畿圏と東海圏の境界に位置する本市は、古来より日本列島の西と東をつなぐ重要な役割を果たしてきた。

『日本書紀』に登場する倭姫命は、大和国から鎮座の地を求めて伊勢神宮へ向かう折、伊賀国の穴穂宮（現神戸神社）に遷座したと伝えられる。また、常陸国の武甕槌神は春日大社へ遷座し春日神を称する際に伊賀国に立ち寄ったとされ、その地が阿保の大村神社であり、川東の春日神社であった。神々が行き来する神話に象徴されるように、西と東の人やモノが往来するのが伊賀であった。発掘された遺跡からは、例えば古墳時代の煮炊きに使う甕形の土器は、東海地方で見られる「台付甕」と近畿地方で見られる庄内式や布留式の甕の両方が出土する。また、現在でも正月に食する餅の形は、鈴鹿山脈・布引山地を境に西側は丸餅、東側は角餅となっており、本市では一部角餅が混在するところもあるが基本的には丸餅である。

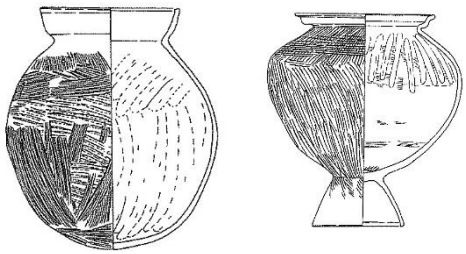


図 39　近畿地方で出土する「布留甕」（左）と東海地方で出土する「台付甕」（右）

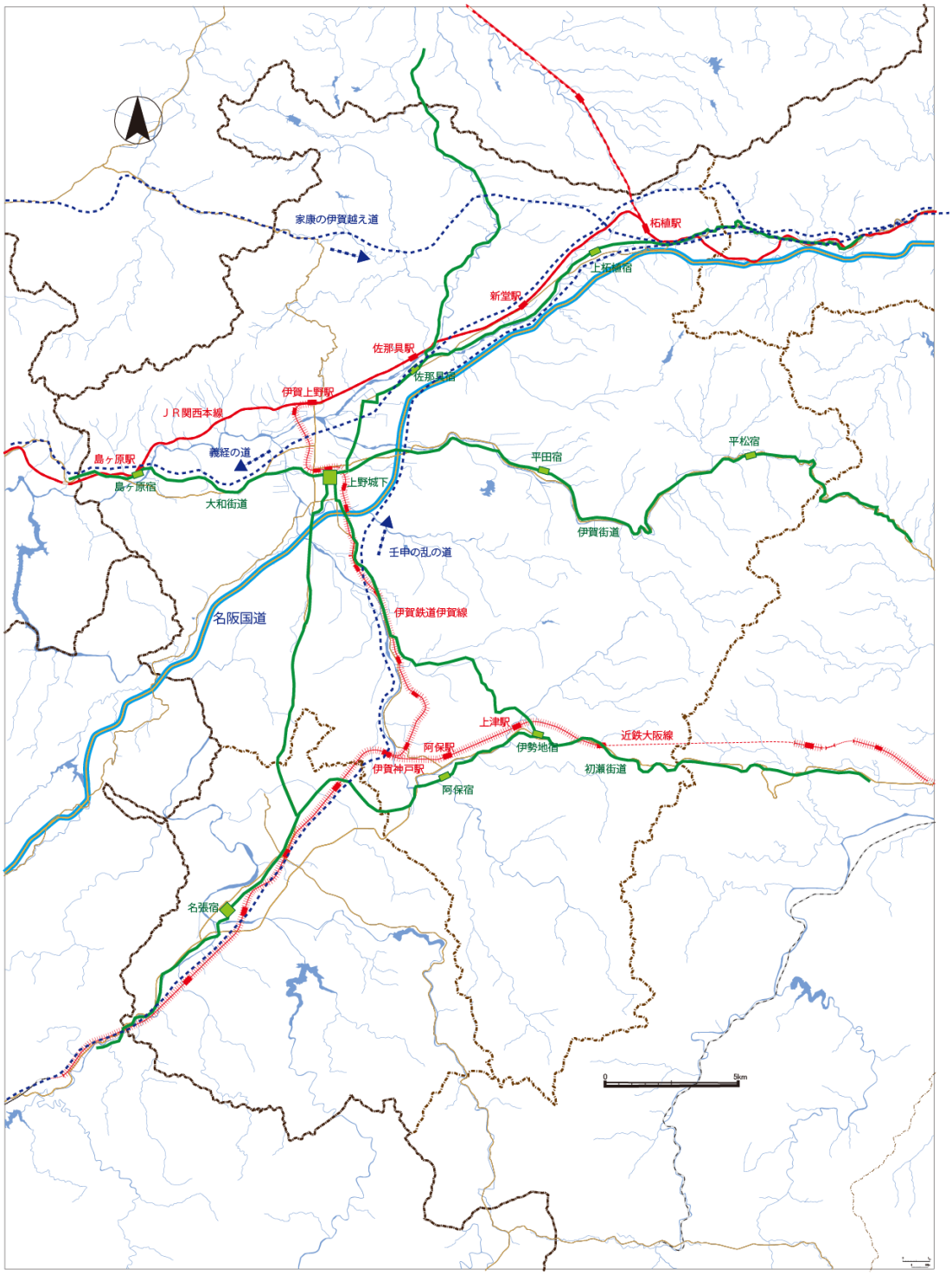


図 40　東西を結ぶ道　関係図（近世の街道　鉄道路線　名阪国道）

西と東の文化が交錯する本市は、古来より英雄が行き交う地でもあった。672 年（天武天皇元）６月に勃発した古代史最大の内乱、壬申の乱では、吉野を発った大海人皇子が大和国南部から初瀬（奈良県桜井市）を経て名張に至り、木津川沿いに北上して柘植から伊勢国へ抜けた。また、平安時代末期、源頼朝の命を受けて東国より攻め上った源

大村神社宝殿

神戸神社本殿

義経は、1184 年（寿永３）１月、伊賀・伊勢国境の加太峠を越えて、柘植から新居、長田を経て南山城から進軍して、京都の木曽義仲を討ち取った。さらに、織田信長が討たれた 1582 年（天正 10）の本能寺の変後、徳川家康が堺から本国三河国への逃避行のため使ったのが、宇治田原から多羅尾、伊賀国北部を通過して柘植から加太へ至る伊賀越えであった。

近世になると交通路の整備とともに中継地点である宿場が整備された。近世伊賀国の街道は、大和国から伊賀国北部を横断する大和街道と、南部を横断する初瀬街道があり、加えて上野城下町東端で大和街道から分岐して津城下へ至る伊賀街道があった。大和街道には島ヶ原・上野・佐那具・上柘植宿、伊賀街道は平田・平松宿、初瀬街道は名張・阿保宿があり、近世中期まで藤堂藩ではこれら８カ所の宿場を総称して「伊賀八宿」と呼称していた。そして、近世末期には青山峠の麓に位置する伊勢地宿が宿場として加えられた。宿場町は、宿泊施設であった本陣や物資の中継施設であった問屋、高札場などが設けられており、旅籠もあった。藤堂藩では本陣や問屋だけでなく、藩の公用の施設「御茶屋」も建てられ、維持管理経費が藩から補填されていた。宿場は周辺の「村」とは異なり「町」として位置づけられていて、上柘植宿のように今でも「上町」「下町」の呼称が残されていたり、佐那具宿や平田宿のように、かつては「上町」「下町」と呼ばれていたところもあった。また、宿場町を貫く街道は、町の真ん中や町はずれで大きく屈曲していて、街道の両脇に間口が狭く奥行の長い、いわゆる「うなぎの寝床」と称される短冊形の地割であるのも宿場町の特徴で、町並みの各所に今もその名残がある。

明治以降の各宿場は、近代の村役場が置かれ商店が軒を連ねるなど、人びとが行き交う各地域の行政・経済の中心地として機能し、街道の基本的経路は、現在も国道 163 号・25 号（大和街道）、国道 163 号（伊賀街道）、165 号（初瀬街道）として受け継がれている。国道沿線には往時の街道の面影を見ることができる。

島ヶ原宿本陣・御茶屋

明治以降、急速に発達したのが鉄道であった。滋賀県草津市と四日市市を結ぶ関西（かんせい）鉄

道の路線のうち、草津から延伸して三雲（滋賀県湖南市）と柘植間が開通したのは、1890 年（明治 23）のことであった。三重県初の鉄道駅となる柘植駅が開設されたのち、1897 年（明治 30）に柘植―加茂間が開通し、伊賀地域が他地域と鉄道でつながった。伊賀地域南部では、1930 年（昭和５）に参宮急行電鉄により榛原―阿保間が開通した。また、1897 年（明治 30）に開業した伊賀上野駅と上野町駅（現上野市駅）を結ぶ伊賀軌道（後、伊賀鉄道）が 1916 年（大正５）に開通した。明治から昭和初期に建設された路線は、ＪＲ関西本線、近鉄大阪線として、今も大阪と名古屋を結ぶ主要な公共交通となっている。

伊賀鉄道上野市駅舎

戦後、モータリゼーションの到来とともに整備されたのが道路であった。1960 年代から道路を舗装する整備事業が本格化したが、とりわけ伊賀地域に画期をもたらしたのが 1965 年（昭和 40）に開通した自動車専用道路、名阪国道であった。1963 年（昭和 38）12 月に工事に着手し、991 日で完成した名阪国道は「千日道路」と呼ばれ、東海圏と近畿圏の物流の大動脈として機能している。

大和街道　大和街道は、伊勢国関の西の追分（亀山市）で東海道から分岐し、加太峠を越え伊賀を経て木津（京都府木津川市）へ至る街道で、島ヶ原宿では、街道に面した本陣・御茶屋の建物（島ヶ原宿本陣・御茶屋）が残されているほか、本陣の岩佐家には、当時の古文書が伝えられている（市指定古文書）。また、京都府との境界には、かつてここが伊賀国と山城国との国境であったことを示す二本杭が建てられている。佐那具宿では城下町で見たような「虫籠窓」や「海鼠壁」が見られ、宿場の中ほどに近代に建てられた府中村道路元標が残る。伊勢国との境界に近い上柘植宿も街道沿いの町並みに当時の面影を残すほか、宿場のほぼ中央に東柘植村道路元標が残る。

料理旅館梅家

伊賀街道　伊賀街道は、藤堂藩の上野と津の二つの城下町を結ぶ街道で、平田宿では、明治期に建てられた旅館梅家をはじめ往時の風情を残す建物がいくつか残されているほか、平田地区の東町・中町・西町にそれぞれの楼車蔵があるのが他の宿場町と異なる風景である。また、平松宿は服部川の上流域に位置し、街道沿いに家並みが残る景観が往時を偲ばせている（料理旅館梅家・国登録）。

初瀬街道　初瀬街道は、松坂から青山峠を越え大和国初瀬（長谷・桜井市）に至る街道

で、阿保宿の西はずれには、1860 年（安政 7）に宿場の篤志者たちにより建立された全高５m近い常夜灯があり、東端の阿保橋には近代に建てられた阿保町元標が残る。かつての旅籠「たわら屋」の参宮講看板（阿保・県有民）は、西国からの参宮客でにぎわった阿保宿の様子を伝えている。阿保の町では、毎年３月に初瀬街道まつりが開催され、かつての宿場のありようを今に伝える取り組みが行われている。伊勢路宿では、街道が折れ曲がる宿場の中心に 1828 年（文政 11）に建てられた太神宮常夜灯がある。宿場のほぼ中央に位置するかつての旅籠「大和屋」の建物は当時の面影をよく残していて、近接する「紅葉屋」とともに参宮講看板（いずれも伊勢路・市有民）が残されている。

たわらや参宮講看板

4-4　上野城下町から近代都市上野へ

藤堂藩の伊賀国領と城和領（山城国と大和国の藤堂藩領）の中心であった上野城下町は、藩政下の城下町から近代都市へと発展した。

明治期から昭和初期の上野城下町区域には、阿山郡役所（1879 年）や上野警察署（1889 年）、上野税務署（1896 年）などの行政機関、三重県第三中学校（1900 年）、阿山郡立高等女学校（1918 年）の中等教育機関が置かれ、第八十三上野銀行（1897 年）、伊賀商業銀行（1896 年）、伊賀貯蓄銀行（同）なども設立された。そのほか、各種商工業の組合や旭座、菅原座といった劇場も開かれた。また、昭和初期には上野城跡の公園整備が進められた。1928 年（昭和３）の万歳館や愛閑亭を皮切りに、地元代議士川崎克により伊賀文化産業城（1935 年 上野丸之内・市有文）や俳聖殿（1942 年 上野丸之内・国重文）が相次いで建設された。

近代化とともに展開した産業に伊賀組紐や伊賀酒、伊賀米がある。伊賀組紐は、江戸に残っていた組紐の技術を 1902 年（明治 35）に廣澤徳三郎が習得して伊賀に持ち帰り、開業したのが始まりである。戦前・戦後を通じて上野城下町区域を中心に本市を代表する手工業生産品となり、1976 年（昭和 51 年）に伝統的工芸品に指定された。また、古琵琶湖層の粘土と清水の恵まれた環境で生育する伊賀米は、明治以降の取り組みにより、有数の良質米となり、現在も全国食味ランキングで特Ａをたびたび受賞し「伊賀米」ブランドとして広く知られている。さらに、清水と盆地特有の気候は醸造業にも適しており、明治以降に伊賀酒の生産が本格的に展開し、現在でも全国展開する銘柄を生み出している。

伊賀組紐

伊賀酒

1941 年（昭和 16）、上野町を中心に 1 町 6 村が合併し上野市が成立した。1955 年前後の昭和の大合併以降も伊賀地域の中心都市として機能し、1950 年代から 60 年代にかけて、上野市庁舎、三重県上野分庁舎、西小学校、上野公園レストハウスなどの公共施設群が坂倉準三による設計により建設された。また、上野公園の整備は戦後も続けられ、戦没者慰霊碑（1955 年）や芭蕉翁記念館（1959 年）が建設されたほか、1967 年（昭和 42）には坂倉事務所設計の観光食堂が開設された。

上野城下町区域には、近世だけでなく、近現代の建造物も数多く残されている。

まず、明治期を象徴する擬洋風建築として、旧小田小学校本館（小田町・県有文）があるほか、北泉家住宅主屋（旧上野警察署庁舎、上野丸之内・国登録）、旧三重県第三中学校校舎（現上野高等学校、上野丸之内・県有文）がある。また、都市化の進展とともに敷設された伊賀鉄道上野市駅（上野丸之内・国登録）や、当初倉庫として建設され、のちに教養・趣味の交流施設として利用された上野文化センター（上野中町・国登録）がある。さらに、明治の風情を残す栄楽館（上野相生町・国登録）や旅館薫楽荘（上野桑町・国登録）、大正ロマンを感じさせる一乃湯本館（上野西日南町・国登録）などが残る。上野城下町区域を歩くと、レトロな風景が各所に残っている。

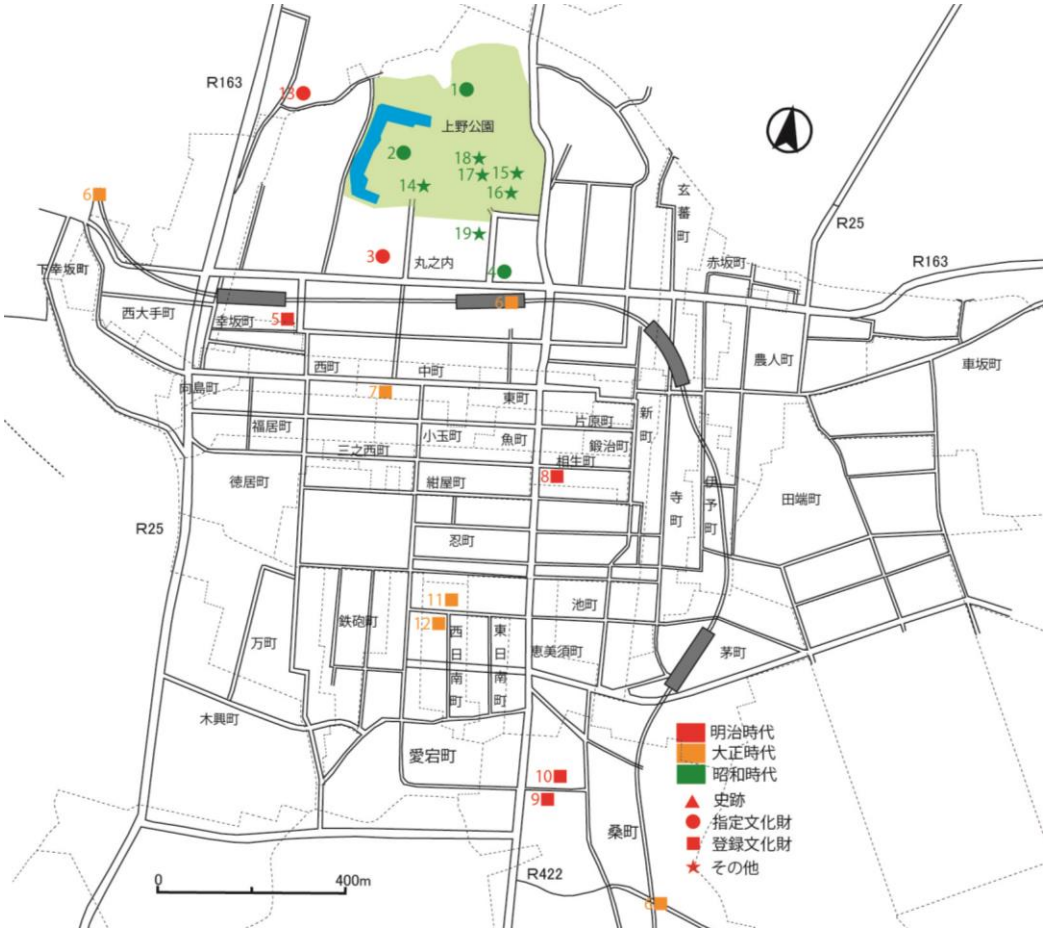


図 41　伊賀市中心市街地における文化財等建造物（近現代）

表 28　伊賀市中心市街地における主な文化財等建造物一覧（近現代）

No	指定種別		名　　称	所在地
1	国	重要文化財（建造物）	俳聖殿	上野丸之内
2	市	有形文化財（建造物）	伊賀文化産業城	上野丸之内
3	県	有形文化財（建造物）	旧三重県第三中学校校舎	上野丸之内
4	市	有形文化財（建造物）	旧上野市庁舎	上野丸之内
5	国	登録有形文化財（建造物）	北泉家住宅主屋（旧上野警察署庁舎）	上野丸之内
6	国	登録有形文化財（建造物）	伊賀鉄道上野市駅舎他	上野丸之内他
7	国	登録有形文化財（建造物）	上野文化センター	上野中町
8	国	登録有形文化財（建造物）	栄楽館南棟･東棟･土蔵･門及び塀	上野相生町
9	国	登録有形文化財（建造物）	旅館薫楽荘本館･蔵･門及び塀	上野桑町
10	国	登録有形文化財（建造物）	いとう旅館本館	上野桑町
11	国	登録有形文化財（建造物）	一乃湯本館･門	上野西日南町
12	国	登録有形文化財（建造物）	旧料理旅館九重本館･別館･門及び塀	上野西日南町
13	県	有形文化財（建造物）	旧小田小学校本館	小田町
14	未	有形文化財（建造物）	愛閑亭	上野丸之内
15	未	有形文化財（建造物）	慰霊塔	上野丸之内
16	未	有形文化財（建造物）	芭蕉翁記念館	上野丸之内
17	未	有形文化財（建造物）	上野公園レストハウス	上野丸之内
18	未	有形文化財（建造物）	上野公園観光食堂	上野丸之内
19	未	有形文化財（建造物）	上野西小学校体育館	上野丸之内

近代の風景は、上野城下町区域だけでなく、市内の随所で見ることができる。近代化の過程で大きな変革を余儀なくされたのが、産業や輸送を巡るシステムであった。巌倉水力発電所（西山）、馬野川水力発電所（奥馬野）の遺構からは、近代産業を支えるためのエネルギーの確保に腐心した様子を見ることができる。また、関西鉄道（現 JR 関西本線）の駅舎やトンネル、伊賀鉄道の橋脚や跨線橋などは、近代化した地域の姿を今に伝えている。

なお、市内の文化財は、近世から現代へと重層的に見られるのが特徴であるが､その理由は、大規模な空襲被害を受けなかったことにある。しかし、戦争の惨禍に見舞われなかったわけではなく、アジア・太平洋戦争により約 2,700 名の市内出身者が戦没した。明治維新後の戦没者を慰霊する慰霊碑・忠魂碑は、市内の各地に建立され、今も戦争の悲惨さを伝えている。

巌倉水力発電所の水路跡